71号

愛鳥教育

2007.4

全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育　No.71 2007.4

目　次

特集　第５回環境教育研修会 in YOKOHAMA

研修会報告 ---------- 堤　達俊　3

環境教育研修会 in YOKOHAMA
案内とテキスト ---------- 堤　達俊　6

実践報告　4-2 鳥調査隊！ ---------- 大野亜紀　11

実践報告
身近な野鳥ツバメを通して
自然・地域を見つめよう」---- 堤　達俊　18

ツバメかんさつ
全国ネットワーク ---------- 神山和夫　22

ツバメやじろべえ ---------- 巣山香里　24

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

もりまき通信(21)
「外来種・移入種
専門センター」の一案 ------ 桐原（森）真希　26

コウノトリの野生復帰事業
・放鳥の開始 ---------- 箕輪多津男　29

書評
鳥よ、人よ、甦れ
～東京港野鳥公園の誕生、
そして現在 ---------- 箕輪多津男　30
ビオトープを考えるヒント ------ 箕輪多津男　31
鳥見びと　望見記 ---------- 箕輪多津男　32
鳥のおもしろ行動学 ---------- 箕輪多津男　33

協力事業風景
東京都巣箱展（平成 16 年）
東京都巣箱展（平成 18 年）--------- 染谷優児　34

編集後記 ---------- 35

研修会報告

第５回環境教育研修会 in YOKOHAMA 報告

～小学校教職員のためのバードウォッチング講座～
「ツバメから始める総合的学習」 報告

常務理事　堤　　達　俊

平成16（2004）年５月16日（日）、ツバメをテーマにした第５回環境教育研修会が無事終了しました。以下、その概要を報告します。

当日の参加者は29名。開会当初は雨だったため、室内での実践発表を先に行い、その後フィールドワークを実施しました。結果的にそれは正解で、フィールドワークの頃には、雨が一時的に上がっていました。

当日のプログラムの流れは、以下の通りです。

９：００　　受付開始（参加者は図書室へ）
９：３０　　開会　続いて実践発表
９：３０～　９：５０　大野亜紀先生
９：５０～１０：１０　堤
１０：１０～１０：３０　井口豊重先生
１０：３０～１０：５０　神山和夫氏による「ツバメかんさつ全国ネットワーク」の紹介
１０：５０～１１：５０　フィールドワーク
１１：５０～１２：００　巣山香里先生のバードクラフト講座
１２：００～　　閉会

実践発表では、小学校の実践として茅ヶ崎東小学校の大野先生と堤が、中学校の実践として井口先生が発表をしました。

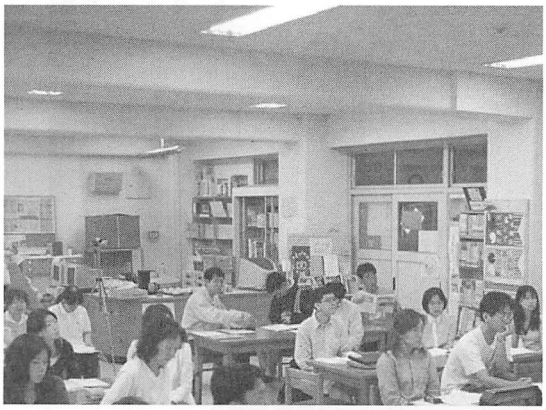
大野先生は、昨年の、初任でありながらの大変すばらしい、クラス全体で１つのテーマを深く追求する実践について発表してくださいました。

私は、テーマ別グループでの学習の様子をお話しました。

井口先生の発表は、中学校ならではのすばらしい実践でした。ツバメの調査活動をもとにテレビ番組を作成したり、ツバメの人工巣を作ったりした実践の報告をして下さいました。

続いて、日本野鳥の会の神山さんが、「ツバメかんさつ全国ネットワーク」の紹介を具体的にしてくださいました。

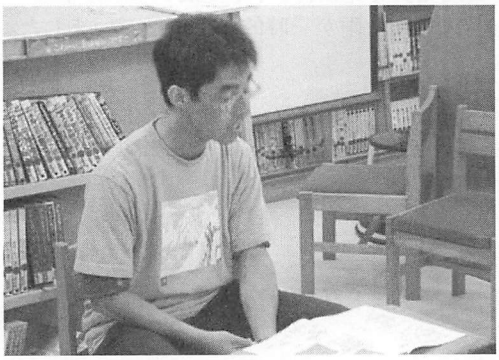
フィールドワークでは、主に鏡を使った卵の観察の仕方、茶こしを使ったツバメの糞の中身の観察の仕方を行いました。



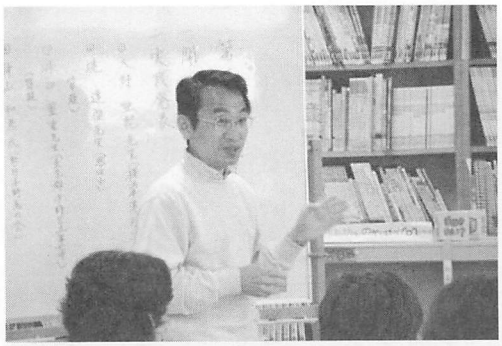
また、ツバメが抱卵中だったため、子育ての様子の観察はコゲラで行いました。参加者は、キツツキの子育ての様子を間近に見ることができて、とても喜んでいました。

その後、再び室内に戻り、巣山先生によるバードクラフト「つばめやじろべえ」の工作を行いました。誰でも簡単に上手に作れるのにはびっくりしました。

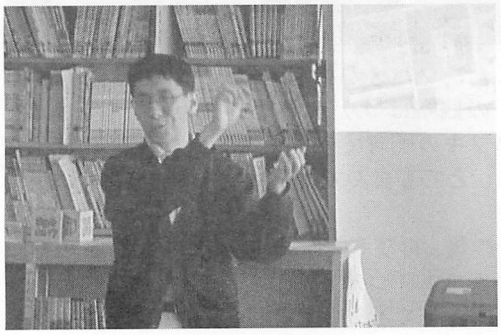
大野亜紀先生の発表



堤達俊理事の発表



井口豊重先生の発表

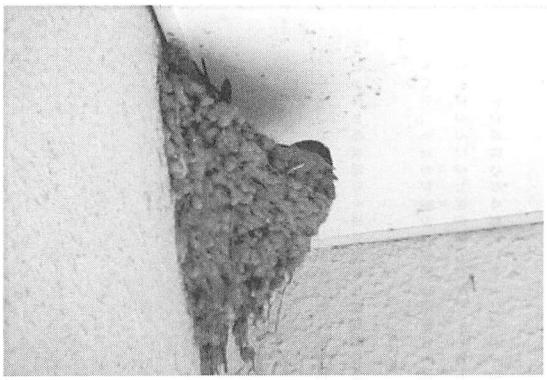


神山和夫氏の発表

校舎壁面のツバメの巣を観察

コゲラが営巣している木

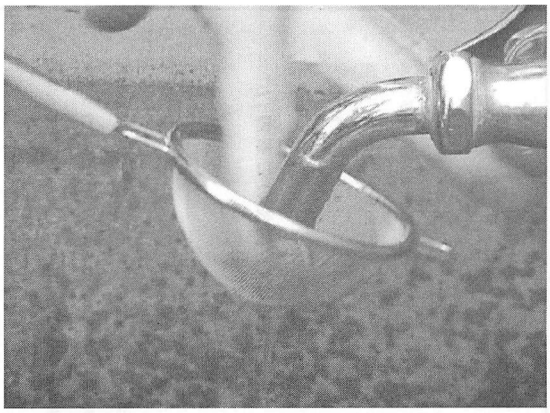
巣山香里先生のバードクラフト講座



下から見上げたツバメの巣（抱卵中）

鏡を使うことで巣の内部が観察できる。

巣の内部を、棒に取り付けた鏡で観察する。



ツバメの糞を茶こしに入れて水道水で洗い流し、残った未消化のものを観察することで、何をえさにしているかを調べることができる。

茶こしに残ったツバメの糞の残留物を、実体顕微鏡で観察する。実際には、昆虫の羽や体の一部などが観察される。

第5回 環境教育研修会 in YOKOHAMA

～小学校教職員のためのバードウォッチング講座～
『ツバメから始める総合的な学習』

「学校に来るツバメを生かして、総合的な学習を始めたいのですが。」

「4年国語の『ツバメのすむ町』のフィールドワークってどうやるの？」

そんな先生方、是非ご参加ください!!

◎日　　時　平成１６年５月１６日（日）　９：３０～１２：００（雨天決行）

◎会　　場　横浜市立恩田小学校（横浜市青葉区）

◎参 加 費　５００円（資料代・保険料等）

◎持 ち 物　筆記用具・あれば野鳥図鑑，双眼鏡など

◎交　　通　東急田園都市線　青葉台駅下車後　バス１０分乗車
市営バス　118系統　　田奈高校前下車徒歩5分
東急バス　日体大行き　田奈高校前下車徒歩5分

◎内　　容　実際に、営巣・子育て中のツバメを観察しながら、子どもが観察する際の留意点・効果的な観察方法等について研修をします。
その後、室内にて、ツバメを生かした総合的な学習の実践例の紹介をします。
初心者大歓迎。環境教育・国際理解教育にもつながる、子どもが主体的に活動できるプログラムをご紹介します。

◎主　　催　全国愛鳥教育研究会

◎申し込み　５月１４日までに、電話かメールでお申し込みください。
TEL：０４２－７９１－６６８９
（PM7：００以降　堤）
e-mail: t-bird@nifty.com

平成１６年４月吉日

横浜市立小学校長様

全国愛鳥教育研究会
会長　杉浦　嘉雄
（日本文理大学助教授）

第５回「環境教育研修会　in　YOKOHAMA」開催のご案内

拝啓　木々の若葉が日ごとに濃さを増す季節となりました。

さて、これまで全国愛鳥教育研究会では、野島青少年野外研修センター・こども自然公園などを会場にし、横浜市にて環境教育についての研修会を４回にわたって行ってまいりました。おかげさまで、毎年多くの横浜市の教職員の方々が参加してくださっております。

そこで今年度は、学校で最も身近に観察できる野鳥の一つであるツバメを取り上げ、、これまで同様、主に横浜市小学校教職員を対象にした環境教育研修会を開催する運びとなりました。

ツバメは、学校で繁殖することも多く、子どもたちにとって大変身近な野鳥です。その活動を観察することにより、子どもたちが地域やその環境へ目を向けることもできます。また、渡りをすることから、国際理解教育との関連を図ることもできます。ツバメは、そのように様々な可能性を秘めた教材でもあります。

そこで、本研修会の意義をご理解の上、貴校の教職員の皆様に広くご紹介頂けましたら幸いに存じます。ご多忙の中、恐縮ではございますが、よろしくお願いいたします。

敬具

第5回 環境教育研修会 in YOKOHAMA

～小学校教職員のためのバードウォッチング講座～
『ツバメから始める総合的な学習』

◎日　　時　平成１６年５月１６日（日）　９：３０～１２：００
（雨天決行）

◎会　　場　横浜市立恩田小学校（横浜市青葉区）

◎参　加　費　５００円（資料代・保険料等）

◎主　　催　全国愛鳥教育研究会

[フィールドワーク]

1　ツバメの観察はおもしろい！

◎　なぜ，ツバメが小学生向きなのか？

[だって1]　ツバメは、とても有名で誰でも知ってる！

・市民に親しまれているので、聞き取り調査がしやすい。
・子どもたちにもお馴染みなので、関心を持ちやすい。
・書籍・ＨＰなどの資料が豊富。

[だって2]　ツバメは建物の、わかりやすい場所に営巣する！

・自然度の少ない地域でも営巣する。
・軒下などに営巣するので、子どもでも見つけやすい

[だって3]　ツバメは比較的人を恐れない！

・双眼鏡を使わなくても観察可能。

しかし、やはり野鳥であるので、警戒心が全くないとは言えません。特に、抱卵期は、警戒心が強く、あまり近づいたり驚かしたりすると、繁殖を放棄してしまうこともあります。

また、最近では、カラスに襲われることも多く、ツバメはより積極的に人間のそばで営巣しようとする傾向があるそうです。それはツバメに限らず、他の野鳥にも言えることです。特に、いわゆる「都市鳥」と呼ばれる野鳥にその傾向が強いようです。

[だって4]　ツバメは渡り鳥（夏鳥）！

・季節の移り変わりを感じることができる。
・国内だけでなく、外国へも関心を持つことができる。

だから・・・小学生でも観察しやすい！
総合的な時間で扱いやすい！

2　ツバメの飛び方を観察しよう！

◎　他の野鳥とも比較してみよう。

（A）スイスイ型

ツバメのようなもの：実際に観察しながら、この枠内に簡単な図を書いてもらう。

（B）バタバタ型

ムクドリ・スズメのようなもの：バタバタ・スーッと飛ぶこともあるが、（C）とは違い、波状を描かない。

（C）パタパタ・ヒュー型

コゲラ・ヒヨドリなど：波状を描くもの

（D）フワリ型

ワシタカ型：当日見られる可能性はかなり低い

（E）その他の飛び方

あとは参加者の感覚で付け加えてもらう

3　ツバメの♂・♀を見分けよう

◎　ポイントは尾羽！　長さをじっくり見分けよう。

[♂と♀の見分け方]

・尾羽の切り込みの深さが２センチも違う！

・一番外側の尾羽が長い方が♂、短い方が♀。

野鳥シートを使って、他のツバメ類との見分け方も簡単に行う。

[成長と若鳥の見分け方]

・若鳥は、♀よりもさらに短い尾羽。

・額や喉の赤みが薄い。

・巣立ち直後なら嘴の基部が黄色い。

当日は観察できる可能性は低いので、写真などを使って説明。

4　ツバメの巣を観察をしよう

◎　巣を様々な観点から調べてみよう

・巣のある場所は？

木ではなく、建物などの人工物が多い。人間との関わりが深い証拠。ガソリンスタンドや車庫の中なども多い。

・巣のある高さは？

主に１階だが、２階から３階の軒下にも作ることがある。

・巣の直径・高さは？ツバメの体の大きさと比べてみよう。

現在営巣中の巣で調べることは難しいので、できれば古巣と使うと良い。どうしてもそれができない場合は、ツバメが自然に巣を離れたすきを見て、素早く行う。
巣のある高さや巣の周りの長さを測る場合は、３年算数の巻き尺の学習が使える。

・巣材は？

実際にツバメの古巣を観察してもらう。そうするとわかるように、泥とわらを使っている。つぶつぶのように見えるのは、ツバメが嘴で少しずつ泥をもってきて作った証拠。唾液を接着剤代わりにして作るらしい。

・他の野鳥の巣と比較してみよう

誰かメジロの古巣とかもっていませんか？？

・ツバメに挑戦！みんなでツバメの巣を作ってみよう。

泥を小さく丸め、わらを混ぜて作ってみようという試み。ツバメの偉大さがわかる？まだ予備実験していないので、可能かどうかは？？？
　３年社会で、昔の家の学習をした時、土の壁を見て、子どもたちは、「人間はツバメに教わったのかもねー。」などという子どももいた。

5　ツバメの卵の観察をしよう

◎　繁殖に影響のないように気をつけて！

・観察道具はどうする？

実際に作ってもらう。道具はこちらで用意する。私のクラスの場合、子どもは、竹馬をひっくり返したものに、平面鏡を貼って作ったが、巣の上部にあまり余裕がない場合は、それでは難しい。子どもの豊かな発想を生かしたい。

・古巣を使って実験道具の効果を確かめてみよう

子どもが試行錯誤を繰り返しながら実験道具作りをする場合、現在繁殖中の巣を使って何度も試みるのは、あまり好ましくはない。そのため、古巣を使って、巣の中がよく見えるか実験すると良い。もし、古巣がない場合、カップラーメンの容器を半分にしたものをガムテープで軒下に付けて確かめると良い。カップラーメンの容器は、巣が壊れ、ヒナが落ちた時に、巣のそばにしっかりと固定すると子育てを継続するらしい。

・繁殖中の卵・ヒナに触るのは法律で禁止されています！

鳥獣保護法で禁じられていることを知らせる。

6　ツバメの子育てを観察をしよう

◎　卵を温める様子を観察しようを調べよう。

・卵を温めるのは一度ににどれくらいの時間かな？
　同じくらいじっと座っていられる？(^^;

ヒナがかえる日が近づくにつれ、抱卵時間は長くなるようです。

◎　餌を与える間隔を調べよう。

・１時間に何回餌を運ぶ？
・１日に何匹の虫を捕まえるのか、計算してみよう。
　１回あたり（　　）匹の虫を捕まえてヒナに与えるとして、

（　）匹　×　（　）回　×　（　）時間　＝　（　）匹

↑　１時間あたりの餌を運んだ回数

↑　日の出から日の入りまで

※　子育て期間が約２０日なので、その２０倍が、子育てのために捕まえた虫のおおよその数となります。

ヒナが大きくなるにつれて、餌を運ぶ回数も増えてきます。また、与える餌もだんだんと大きくなるようです。恩田小では、まだツバメのヒナがかえりそうもないので、このフィールドワークができませんが、参加者数が少なければ、校庭のコゲラで同様の観察をしてみても良いと思います。当日は、校庭で地域の野球チームが練習しているので、基本的に難しいのですが。

7　ツバメは何を食べる？

◎　ツバメの食べ物を調べよう。

・ツバメの糞を調べると、食べているものがわかります。実際に見てみよう。

（１）巣の下から糞を採集する

（２）湯を入れた紙コップの中に糞を入れ、糞をほぐす。

（３）濾紙でその液を濾し、解剖顕微鏡や双眼実態顕微鏡で観察する。
※茶こしの中に糞を入れ、指でや軽くほぐしながら不純物を洗い流してもよい。

野生動物の食性を調べる方法としてはごく一般的ですが、鳥インフルエンザの安全宣言が出るまでは、この実験は避けた方が賢明だと思われます。（当日は行うが）

実践報告[1]

横浜市立茅ヶ崎東小学校　　大野　亜紀

「総合的な学習の時間」活動案

1　日時　　平成15年10月14日（火）第5校時（4M）
　　<活動場所～晴天時：校舎の裏庭，雨天時：4－2教室とホール（校舎の裏庭）>
2　学年・組　　第4学年2組　計38名
3　単元名　　「4－2鳥調査隊」
4　単元について
（1）児童の実態

ツバメへの思いの深まり

4月の後半、理科「季節と生きもの（春）」で季節によって生きものの様子の違いを感じるために、生態園に行った際、ツバメを探してみた。「いないね。まだ早いのかな。」と子どもたちは口々にそろえて言っていた。学習の流れで、つばめのビデオを見たときには、ひなのかわいらしさに子どもたちは目を輝かせていた。「ツバメに、ひなに会いたい。」その思いが少しずつ子どもたちに出てきた。

12児の案内で、センター南駅近くのビルの巣を見に出かけた。初めて巣を見た子どもたちはその存在に感動していた。しかし、じっと巣を見つめるが、ツバメが見えない。16児の「ツバメはいるの？」「巣の奥に隠れているのかな。」をはじめ、いろいろな疑問が出てきた。ツバメの巣との出会いは、子どもたちの関心をよりふくらませるものとなった。

5月になり、朝の会で日直さんがスピーチをする「わたしのニュース」で、子どもたちからつばめ情報が集まってきた。17児「習い事に行くときに飛んでいるつばめを見た」33児「ガソリンスタンドの近くにもいたよ」1児「ツバメがいるか分からないけど、去年見た巣はまだあったよ。サンホール茅ヶ崎のビル。」など。発言や日記から、子どもたちの関心がツバメに向いてきているように感じた。

活動の始まり

そこで、ツバメについて知りたいことを出し合った。様々な思いが出てきたが、子どもたちには「まずみんなで一つのことを取り組みたい」という思いがあり、そこで「ツバメの巣台・巣箱づくり」「ツバメマップづくり」という二つの活動への意欲が盛り上がってきた。後者の活動は、国語『ツバメがすむ町』でツバメ調査のフィールドワークを行い、ツバメマップを完成するといった内容であったが、6児「わたしたちも、自分たちのツバメマップをつくりたい」という発言がきっかけとなったものである。27児「ぼくは、巣箱と巣台をつくったら、それらを比較したいな。」9児、6児「ツバメの巣箱の入り口の大きさは？」「大きかったら、他の鳥がすみついてしまうよ」29児「もしすみついたら、その野鳥も鳥の仲間だから観察したら楽しいよ!!（子どもたちから大きな拍手が起こった。）」22児「ツバメや野鳥のプロフィールづくりはおもしろそうだよ。」というように活動への思いがふくらんできた。どちらの活動から始めるかという話題で早くも行き詰まりがみられたが、26児、4児「ツバメのことをまず資料で調べようよ。そしたら、両方の活動に役立つよ」の言葉に、大きく動き出し、図書の時間を当てて本や資料を探したり、インターネットを活用して調べたりする活動に進むことになった。

ツバメマップづくり

その後、「ツバメマップをつくろう」ということで、ツバメ調査を継続して行った。中心となったのは、2回のグループによるツバメ調査であった。1回目は授業参観の時間に行い、保護者の協力を得ながら、活動を進めた。2回目はやはり数人の保護者のかたに安全面を考えお手伝いをお願いしながら行ったのだが、子どもたちは1回目のツバメ調査を活かしての調査活動をしようという思いがあった。

5児が「一回目の調査は、いろいろな方面に散らばっていた。2回目は調査する場所や内容をもう少し絞ったほうがいいのではないか。」と発言したことから、ツバメのいそうなところを1回目の調査で分かってきたので、2回目はもう少しポイントを絞っての活動となった。そして、その調査活動で分かったことは、ツバメマップや新聞等、子どもたちの思い思いの方法でまとめていった。

ツバメの巣台巣箱づくり

その活動と並行して行っていたのが、「ツバメの巣台巣箱づくりに挑戦しよう」という活動であった。放課後、子どもたちは建設中の家を進んで訪ね、いらなくなった木材をお願いして集めてまわった。ある程度の木材が集まってきたので、巣台巣箱作りをすることになった。木材を使って何かを作ったことのある子どもたちをリーダーにグループ分けをし、実際につくる活動となった。初めてのこぎりや金槌を扱う子どもたちもいたが、子どもたちは教え合い助け合いながら活動を進めていた。木の香りや木くずの触感、木を切ったり釘を打つ際の迫力ある音などを楽しみながら、子どもたちは生き生きとした表情で活動していた。1学期には愛川体験学習もあり、完成できずに夏休みを迎えたが、続きは2学期に行うことになった。

（2）教師の意図

本校は多種多様な環境に囲まれている。自然豊かな生態園や茅ヶ崎城址がある一方で、たくさんの公園や緑道が整備され、合間をぬうように住宅やビルが建ち並ぶ。理科や国語科の学習で興味を持ったツバメ、そして野鳥への思いがふくらんでいくことで、活動が始まっていった。スズメやカラスといった頻繁に目にするもの以外の鳥は、子どもたちの視線にも入りにくいのか、気に留めることが少なかったようである。野鳥を観察し、巣箱をかけたりすることを通して、身近なところに様々な野鳥がいるということを知り、野鳥を窓口に自然や生きものへの愛着を深め、大切にしていこうという生き方を育むことができればと思う。そして、身近な地域にそのような環境があることのよさに気付き、そのよさを守るために、地域の環境保全や美化活動にも進んでかかわろうというところまで高められればと願っている。また、巣箱づくりでは野鳥の入り口となる部分をつくるため、鳥の体型を考えながら、木材にコンパスで円をかく活動などが出てきた。コンパスの使い方は1学期の算数科で学習してきたものであるが、このように教科で学習したことを、総合的な学習の時間で積極的に活かし、「学習がより具体的で切実感のあるものである」という意識が、教科学習の動機づけや理解の深まりにつながっていくとよいと思う。

（3）テーマとのかかわり

◇中学年テーマとのかかわり

【中学年テーマ】　自分たちのまちの人やもの、ことかかわる中で、『つながる』『創る』『ひらく』力を高めていく子

○「つながる」力とのかかわり

ちがさきのまちの鳥を通して、自然と自分とのかかわり合いを深めていく。活動のなかで、地域の人たちにインタビューしたり、専門の方々から様々なことを教わったりする機会をもつなかで、人とのつながりを大切にする姿を願っていきたい。また、友だちとのかかわり合いを深めていくことを通して、お互いのよさを知り、そのよさを発揮しながら活動していく姿を願いたい。

○「創る」力とのかかわり

「手作りの巣箱を設置したが鳥がきてくれない」「鳥は小さく動きがすばやいので観察するのが難しい」などのさまざまな課題を、子どもたち一人一人が切実な課題として実感し、その解決に向けていろいろな角度からものごとを見て、ともに追究する仲間と話し合いをしながら、粘り強く問題解決に向かっていこうする姿を願いたい。

○「ひらく」力とのかかわり

鳥をテーマに取り組み、追究・解決してきたことなどを、学校の子どもたちや保護者、地域の人たちに表現方法を工夫しながら分かりやすく伝え、鳥とかかわるなかで感じることのできた「このまちのよさ」を訴えていく姿を願っていきたい。

◇中学年テーマに迫るために

①題材開発

この学習は、他の教科での学習がきっかけとなっている。そこで、ツバメに興味をもった子どもたちが、日々の生活の中でツバメやその他の鳥に目を向けていき、朝の会のスピーチや会話など、子どもたちの表現活動に現れてきたことことから始まっている。そこから、自分たちのまちにもツバメがいるという意識から、「ツバメを調査してツバメマップをつくりたい」「巣台巣箱をつくってツバメをよびたい」という思いが出てきた。ツバメの調査活動で、ツバメ以外の鳥に出会ったり、スズメの巣作りを観察したりしたことから、興味関心がちがさきのまちにいる鳥に広がり、「ちがさきのまちの鳥を観察したい」「手作りの巣箱にきてほしい」などの思いとともに、活動が発展してきている。

②子どもをどう見取るのか、そしてそれをどう生かすのか（教師の支援）

子どもたちの発言や学習カードに書いた内容をこまかくとらえていき、話し合い活動やその他の活動で生かす形で返していく。その他にも、担任と子どもの、子ども同士の何気ない会話やつぶやきを大切にし、子どもたち一人一人がどのようなことに今興味・関心をもち、どのような思いや願いをもっているのかを寄り添うなかで感じとっていきたい。また、困難にぶつかった場合には、みんなで共有し、じっくり話し合い、見つめ直すなかで、乗り越えていきたいと思う。

5 単元目標

自分たちの住んでいるまちにいる野鳥を観察したり、調査したりする活動を通して、まちには、様々な野鳥が生息していることやいろいろな特徴があることに気付き、自然や生き物及びまちへの愛着を深め、大切にしていこうとする気持ちや態度を養うことができる。

6 単元の評価規準

観　点	評　価　規　準
コミュニケーション	○鳥や自然とのふれ合いを通して、自分の考えや意見をしっかり述べるとともに、相手の考えや意見を尊重しながら、協力して活動していこうとする。 ○地域の人や専門の方の話を聞いたり、疑問に思ったことを質問したりしながら、人とのかかわりを深めようとしている。
問題発見・問題解決	○野鳥の観察、巣箱づくりの過程で生じる様々な問題に立ち向かい、仲間と協力しながら粘り強く解決しようとする。
自分らしさの発揮	○野鳥の観察、巣箱づくり、追求したことを伝える活動などに対して、自分なりの考え方で工夫しながら活動し、自分のよさを見つけようとしている。
情報の処理・加工・発信	○野鳥や巣箱づくりについて、分からないことや知りたいことを取材したり、調べたり、整理したりして、仲間に伝えようとしている。 ○活動してきたこと、追究したことをまとめ、相手にあわせて分かりやすく伝えていこうとしている。

7 単元構想 ＜総時数 75時間（225M）＞

4－2鳥調査隊！

ツバメマップをつくろう！ 12時間（36M）
- ○ツバメ情報を集めよう。
- ○ツバメのことを調べよう。
- ○ツバメ調査に出かけよう。
- ○調査したことをツバメマップにまとめよう。

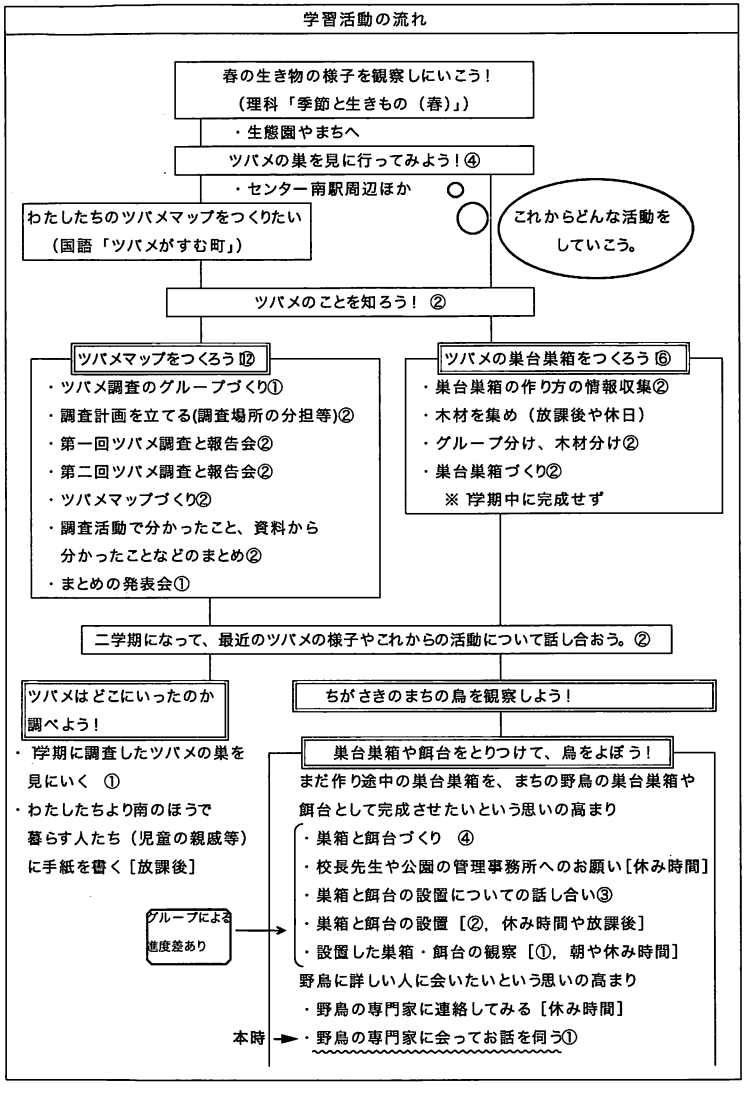
ツバメの巣台巣箱づくりに挑戦しよう！ 10時間（30M）
- ○巣台巣箱のつくり方の情報を集めよう。
- ○材料となる木材を自分たちで集めよう。
- ○巣台巣箱をつくってみよう。
- ○手作りの巣台巣箱をとりつけて、ツバメをよぼう。

まちにいる鳥を観察しよう！30時間（90M）
- ○まちにいる鳥をよんで、観察してみよう。
  - ・巣箱巣台や餌台をつくり、取り付け、観察する。
  - ・巣箱巣台や餌台を設置することが鳥にとっていいことなのかを考える。
- ○まちにどんな鳥がいるのか調べてみよう。
  - ・まちに野鳥調査に出かける。　・バードウォッチングをする。
  - ・バードウォッチングや野鳥のことについて達人に聞いてみる。
  - ・鳥マップをつくる。

まちの鳥のことを知らせよう！ 22時間（66M）
- ○活動してきたことや追求したことをまとめ、まちの鳥のことを学校の人たちに知らせよう。
- ○まちの鳥のことを家族や地域の人たちに広め、鳥のすむまちを見つめ直してもらおう。

お世話になった人にお礼の手紙を出そう！ 1時間（1M）
- ○お世話になった人にお礼の手紙を書く。

8　本時までの学習の流れ



9　本時の学習

（1）本時目標

自分たちが活動してきた巣台巣箱や餌台づくり、そしてその設置を通して（に向けて）出てきた課題や疑問、またこれからの野鳥観察への思いを、野鳥の専門家であるHさんに伝え、交流をもつなかで、解決したりその方の思いや考えに触れたりすることができる。

（2）評価規準

㋔専門の方の話を聞いたり、疑問に思ったことを質問したりして、Hさんの思いや考えにふれながら、交流しようとする。

㋥餌台・巣箱がけや野鳥観察について、分からないことや知りたいことをHさんに分かりやすく表現しようとする。

（3）展開

学習活動と内容（☆教師のかかわり）	時間
1　あいさつ、自己紹介をする。 ○自分の名前と一言を言う。 ☆Hさんからも一言をいただくようにする。日頃、つづき博士倶楽部でどのような活動をしているかについてもふれてもらう予定である。また、Hさんに野鳥調査に出かけるときの服装と持ち物を見せてほしいと子どもたちからお願いしている。	5
2　Hさんに巣台巣箱や餌台のこと、野鳥のことを教えてもらおう。 しつ問コーナーと見てもらうコーナー ○グループごとや全体で質問をしたり、できあがった巣箱やすでに設置した餌台・巣箱を見てもらったりしながら、Hさんと交流をする。 ※活動場所　晴天時：校舎の裏庭　雨天時：4－2教室やホール となっているが、雨天時の場合も、設置した餌台巣箱を見てもらうときには、校舎の裏庭に出ることになる。☆足下が滑りやすいこと、傘をさすことによる危険性に気を配る。	20
3　Hさんに教えてもらったことをもとに活動する。 ○巣台巣箱や餌台そのものに手を加えたり、取り付けをやり直したりする。 ☆活動がすぐにできない場合には、他のグループの活動を見て、一緒に考えたり教え合ったりするよう支援し、自分たちの次の活動に活かせるようにする。	20
4　Hさんに話を伺って分かったことや感想を伝える。 ☆Hさんからもお言葉をもらう。まずは、子どもたちが鳥を身近に感じ、親しんでもらいたいという担任の願いがある。餌台巣箱が環境に及ぼす影響については、子どもたちが鳥に十分親しみ、環境保全のことを考えられる段階にまで達していれば、ふれてもらう予定である。	10
5　Hさんにお礼の言葉を伝える。 6　今日の活動をふりかえり、カードを書く。	5

[活動報告]

1　単元名　「 4－2鳥調査隊 !」
2　単元目標
　自分たちの住んでいるまちにいる野鳥を観察したり、調査したりする活動を通して、まちには、様々な野鳥が生息していることやいろいろな特徴があることに気付き、自然や生き物及びまちへの愛着を深め、大切にしていこうとする気持ちや態度を養うことができる。
3　活動の流れ

≪活動のはじまり≫
○春の生き物の様子を観察しにいこう！（理科「季節と生きもの（春）」）
ツバメの巣を見に行ってみよう！④（16M）
・わたしたちのツバメマップをつくりたいな。（国語「ツバメがすむ町」）

ツバメマップをつくろう！ ⑭（42M）
○ツバメ情報を集める。
ツバメのことを調べよう !②（6M）
・ツバメのことを知りたいな。図書室の本やインターネットで調べてみよう。
ツバメ調査に出かけよう !⑦（21M）
○校長先生にお願いにいく。
○グループづくりをして、調査計画を立てる。
○第一回ツバメ調査と報告会をする。
○第二回ツバメ調査と報告会をする。
ツバメマップをつくろう !⑤（15M）
○調査したことをツバメマップにまとめる。
・調査したこと以外にも、資料から分かったことも一緒にまとめたいな。
○いろいろな方法でツバメのこと、ツバメ調査のことをまとめる。
◇これからの活動は？　→ツバメの巣台や巣箱をつくって、鳥をよびたいな。

【 まちのツバメ調査】

ツバメの巣台巣箱をつくろう !⑥（18M）
○巣台や巣箱の作り方の情報を集める。
・前に巣箱を作ったことあるよ。・おじいちゃんに聞いてみたよ。・本にも載ってるよ！
○自分たちで材料となる木を集める。
・放課後や休みの日に家を建てている大工さんを訪ねて、余っている木をもらったよ。
○グループに分かれ、どんな巣台や巣箱を作ろうか、話し合う。
○巣台巣箱をつくる。
・のこぎりで木を切るのはとても大変だよ。・金づちで釘をまっすぐに打つのは難しいね。
◇2学期の活動は？　→巣台巣箱を完成させたい それから･･･。
＜1学期終了＞

ちがさきのまちの鳥を観察しよう !⑲（105M）
2学期の活動は ?②（6M）
○1学期の活動を振り返り、2学期の活動を考える。
・ツバメがいなくなってしまった･･･。巣台巣箱を作ってツバメをよびたかったのに･･･。
・ツバメはどこにいったのかな。
・作っている巣箱巣台で他の鳥をよべないだろうか。巣台は餌台として使えるよ。
・巣箱や餌台でまちの鳥をよぼうよ。それに、まちの鳥を探しにいきたいな。
ツバメはどこにいったのか調べよう！ ①（3M）
○1学期に調査したツバメの巣を見に行く。
・ツバメはやっぱりいなくなってる。渡ってしまったんだね。
○わたしたちより南の方で暮らす友だちや親戚の人に手紙を書く。
手作りの巣箱や餌台をとりつけて、鳥をよぼう！ ⑩（30M）
○巣箱と餌台を完成する。
○校長先生や公園の管理事務所へ巣箱取り付けのお願いをする。
○巣箱と餌台の設置について話し合いをする。
・公園につけたかったけど、取り付けるのが難しいね。
・巣箱が落ちて、公園で遊ぶ人たちがけがしないようにしたり、巣箱を観察するのに毎回公園に行くのは大変だね。たくさんの問題があるよ。
・すぐに観察できて、巣箱に責任をもてるように、学校内にとりつけよう。
○巣箱と餌台を設置する。
・どんな木に設置したらいいのかな。高さとか関係あるのかな。
・自分たちの巣箱や餌台で本当に鳥がくるのかな。
・このまちにはツバメ以外にどんな鳥がいるのかな。
・図鑑で調べたけど、ここに書いてある鳥、みんなこのまちにいるのかな？
・巣箱や餌台、鳥に詳しい人に会って、自分たちの巣箱や餌台を見てもらったり、鳥のことをいっぱい質問したいな。
鳥の達人さんに鳥のこと、巣箱餌台のことを教えてもらおう！ ⑦（15M）
○達人さんに連絡をして、学校にきてもらえるかお願いをする。
○達人さんに会って、質問すること、見てもらうことなどを考えたり、お迎えする準備をする。
○達人さんに会って、鳥のこと、巣箱餌台のことを教えてもらう。
・巣箱がぐらぐらしているといけないんだって。
・巣箱の直した方がいいところを見てもらったよ。

【 巣箱づくり】

【 巣箱のとりつけ】

【 達人さんにお話を伺う】

・このまちでよく見られる鳥を教えてもらったよ。
○達人さんからアドバイスしてもらったことを活かして、巣箱の修理をしたり、設置し直したりする。

巣箱と餌台にくる鳥を観察しよう！　（　M）
○週に1～2回巣箱と餌台の様子を見にいく。・
・なかなか鳥がこないね。
・どうしたら鳥がくるかな。
・巣箱のある木や巣箱に鳥のフンがあるよ！
・裏庭の木に鳥がいる 何の鳥かな？
○グループの発見をお互いに交換する。

バードウォッチングに出かけよう！　（　M）
○バードウォッチングに行く場所を話し合う。
・自然のいっぱいある地区公園に行こうよ。
○地区公園にバードウォッチングに行く。
・大きなカラスの巣があった。
・ヒヨドリが 2羽いたよ。
・シジュウカラ、かわいかったな。
・もっとバードウォッチングに行きたいな。
○学区の他の場所にも行ってみる。
【せきれいの道、早渕川沿い･･･。】

◇3学期の活動は？　→巣箱と餌台で鳥をもっとよびたい やってきた鳥の観察を続けよう！
バードウォッチングをして、もっとたくさんの鳥に会いたい！
＜2学期終了→ 3学期へ＞

○巣箱と餌台の観察を続ける。
・鳥がいる 観察しようと思ったら、逃げちゃったよ。
・冬休みにみかんを置いたら、鳥がいっぱい来たよ。みかんの切り方を変えて比べたよ
・一年生が巣箱に出入りする鳥を見たって !!
○よりよい観察の仕方を話し合う。
・みんなで協力して静かにしていかないとね。
・洋服を目立たない色にしたらどうかな。
○いろいろな工夫をして、観察を続ける。
・餌台にメジロが来てる ゆみかんを食べてる！
・フンがいっぱいあるよ。
・ビデオで鳥が来ている様子を撮りたいな。

○みんなの鳥情報をもとに、いろいろなところへバードウォッチングをしに出かける。
【駅前のスキップ広場、都筑中央公園せせらぎ公園･･･。】

【バードウォッチングへ】

鳥と人間のかかわりを考えよう！ ④（16M）
○今まで鳥と人とのかかわりで感じたことを話し合う。
・スキップ広場で、ハトがどんどん寄ってきた。他の野鳥とは違うね。
・この間、餌をあげている人を見たよ。
・放課後、ぼくも友だちと餌をあげに行ったよ。
・餌付けすることっていいことなのかな。
・鳥は野生なんだから、やってはいけないと思う。
・昆虫や実などの餌がない冬は、食べ物がなくて死んでしまうよ。
・食べ物の少ない時期にだけ、あげたらいいんじゃないかな。
◇みんなが餌台でえさをあげることは？
・観察が目的だから、いいんだよ。ちゃんと、餌台なども責任持ってそうじできるし。
・餌をあげるという点では同じような気がするけど･･･。

4　考察
　「ツバメ」から「まちで見られる野鳥」へと思いが広がり、いくつかの活動が立ち上がっていくにつれて、まちには様々な野鳥が生息していることやいろいろな特徴があることに気付くことができた。そして、野鳥そのものへの愛着、野鳥のすむ場となる自然への愛着、自然や生き物に恵まれたまちへの愛着の気持ちを育むことができた。それは、子どもたちが巣箱や餌台の様子を地道に見続けていること、日頃から野鳥を観察していること、おうちの人に野鳥のことを教えようとすること、鳥が特集されている新聞をスクラップしたり、鳥の羽を集めて標本にしようとしたりして自分で活動をつくっていくことなどの態度面からも伺い知ることができる。総合的な学習の時間での活動が、子どもたちの生活の一部となっていることをたいへんうれしく思う。
　ツバメ調査や巣箱づくりでは、グループでの活動が中心となったが、自分の考えや思いを伝え、相手の考えや思いを聞きながら、協力して活動することの大切さを実感していた。鳥の達人さんとの出会いはとても大きかったようで、活動するなかで出てきた様々な疑問を、本や資料からだけではなく、地域の人や専門の方といった人とのかかわりのなかで解決しようとする姿勢も育ってきた。また、「巣箱づくりが思うようにいかない」「手作りの巣箱になかなか鳥がこない」「野鳥の動きがすばやく観察が難しい」などの困難に直面したときには、クラスみんなでじっくり話し合いをし、方向性を決めたり解決の道を探っていった。それが、一人ひとりがそれぞれの課題にしっかり向き合い、最後までねばり強く取り組む力、新たな活動をつくり出す原動力となっていった。のこぎりや金づちを使っての活動は初めて体験する子どもも多かったのだが、それらの道具を上手に扱える友だちのよさを発見したり、「鳥を見分けるのが上手だ」「地図を見るのが上手だ」「木の登って巣箱をつけるのが得意だ」といった自分のよさを発見したりすることとなった。それが、教科学習や学校生活においての自信につながっていった。日々の活動を記録してきた学習カードは、自らを振り返る評価につながり、同時に一年間の学びの足あととなった。一方で、設置した巣箱に鳥が巣をつくるのを見られるのは、来年度の春から夏にかけてのことであるため、ともに成果を見ることができないのは非常に残念である。巣箱や餌台の今後については、子どもたちと話し合っていきたいと思う。また、まずは「子どもたちが野鳥に十分親しんでほしい」という願いをもって活動してきたため、もともと教師側の意図していた「環境保全」という視点にまで高めていくことは難しかった。この単元では、一年間は長いようで短かった。
　今後の課題としては、活動中や「学習カード」などでの一人ひとりの見取りをさらにきめ細やかに行っていき、その見取りをその後の活動での助言や支援のなかでいかに活かしていくかを学んでいきたい。さらに、子どもたちにとって魅力ある「材」をさぐっていきたい。

4－２鳥調査隊！劇場　　台本

①グループ　どうして鳥のことを総合ですることになったのか

メンバー　１　２　３　４　５　６　７

語り　グループ　春をさがしにせいたいえんに行こう。　（左手をグーにして歩く）

動作　〔１〕　カワセミが飛んでいるところ

４　あっ、カワセミだ。　（指をさして）

２　ツバメはまだいないね。　（答えるみたいに）

５　ツバメのじょうほうを集めてみようよ。

みんな。

動作　〔１〕　ツバメが巣に入っていくところ

６　巣に入っていくツバメ発見！　（ツバメを指さして）

７　もっとツバメのことを調べよう。　（歩きながら）

グループ　グループでツバメ調査にいこう。

４　調査の結果をツバメマップでまとめよう。

３　中央の辺にたくさんツバメの巣があったね。　（ツバメマップを指して）

１　季節によって、ツバメの居場所はちがうの？

２　ツバメは春に日本にくるよ。

１　夏も日本にいるね！

５　冬は、あたたかな東南アジアで過ごすよ。

７　オスとメスは協力して巣をつくるよ。

３　コンクリートの町はすみにくいんだって。

６　つまり、ツバメはあたたかくて、人の多いところを好むんだね。

②グループ　巣箱とえさ台づくり

メンバー　８　９　10　11　12　13

語り　８　わたしたちは、32さんの提案で、巣箱・えさ台をつくる

ことになりました。

みんな　よーし、みんなでがんばろう！　（右手を挙げる）

13　まず、木を集めることにしいました。　（木をとりにいく）

グループ　やっと集まった。

10　よし！さっそく作るぞ！

みんな　エイ　エイ　オー！　（右手を挙げる）

音楽　〔　　〕　のこぎりと金づちの音

動作　〔８・９〕　のこぎりで木を切る　（みんなで首ふり　横はダメダメ）

動作　〔11・10・12・13〕　金づちで釘を打つ

語り　11　意外と作るの、大変だねー。

語り　みんな　できたー！

12　さっそくとりつけよう！　（両手をあげバンザイする）

語り　９　とりつけ終わったー！

みんな　はやく鳥がくるといいね！　（手をあげてジャンプ）

③グループ　鳥の達人、Ｈさんとの出会い

メンバー　15　16　17　18

語り　グループ　達人さんとの出会い

17　出会いの最初は、大野先生が冊子を見ていて、達人のＨさんの名前を見つけたのがきっかけでした。

18　先生からその話を聞き、さっそく電話をかけることにしました。

音楽　〔17〕　電話の音

動作　〔15〕　電話をかけているところ

語り　18　そして、来てくれることをＯＫしてくれました。

語り　グループ　達人さんに教えてもらったこと

16　巣箱の穴の大きさは、その鳥に合わせて作ることです。

17　えさは主にフルーツやジュースです。

18　ふんの色は必ず黒と白です。消化できないものは、吐き出してしまいます。

語り　16　バードウォッチングで大切なことは、「大声を出さない」「走らない」などです。

動作　〔17・18〕　走ったりさわいだりする様子

語り　15　バードウォッチングの時の服そうは、グレーや緑など、自然の色に合わせた、目立たない色の服を着ることです。

④グループ　巣箱やえさ台を観察して初めて鳥が来たときのこと

メンバー　19　20　21　22　23　24　25　26

語り　グループ　私たちは鳥がえさ台に来ているのかを観察しました。

25・21　今日は鳥がきているかな？　（えさを持ちながら）

動作　〔19以外のグループ〕当たりを見回す

音楽　〔19〕　少ししたら、ピーピーと鳥の鳴き声を流す

語り　22　あ！鳥の鳴き声だ。

22以外のグループ　あ！本当だ。

20　何の鳥の鳴き声だろう？

23・24　メジロの鳴き声かな？

動作　〔26〕　鳥を動かす

メジロがえさ台にくる

〔みんな〕　クラスで観察

語り　26　※２～３秒後、その鳥の特ちょうを言う

目の周りが白いね！

動作　〔26〕　５秒後、鳥がにげる

語り　19　あ！鳥がにげちゃった！　じゃあ、帰ろう！

動作　〔グループ〕　出てる人が元の場所にもどる

語り　グループ　このようにして、鳥の観察を続けています。

⑤グループ　バードウォッチングのこと

メンバー　27　28　29　30　31　32　33　34

語り　30　バードウォッチングでいろいろな鳥を観察するために
たくさんの公園に行きました。

29　あっ、あそこに鳥がいるよ！　（指でさして）

27　あれ、キツツキだよ！　図かんで調べてみよう！

34　あの鳥には、名前があるよ。コゲラって言うんだね。
シマシマもようで、ドアがきしむような鳴き声なんだね。　（図かんを見ながら）

31　みんな静かにしないと、鳥がにげちゃうよ。　（メモするまね）

32　今何分？　メモしないと。　（指でさして）

33　向こうにもいるよ。

28　あっ、本当だ。

30　あれは、ヒヨドリかなー？

34　たしかに、なみなみに飛んでいるから、ヒヨドリだよ。

グループ　こんな感じで、バードウォッチングをして、鳥を観察してきました。

⑥グループ　鳥にえさをあげることについて話し合ったこと

メンバー　35　36　37　38　39　40

語り　グループ　私たち・ぼくたちは、鳥にえさをあげることについて
話し合いました。

39　あっ、あそこに鳥がいるけど、えさをあげていいかな？

40　あとでゴミにならないのかな？

36　かたづければいいんじゃないの？

35　そして、鳥にえさをあげることについて、クラスのみんなは
賛成と反対に分かれました。

37　賛成の人の意見は、「えさが少ないときはあげてもいいのでは」
という意見で

38　反対の人は、「それだったら鳥が野性にもどれなくなって
しまうよ」という意見でした。

40　それで、みんなで今話し合っているところでは、
「えさをあげる回数をへらしたり、えさの量をへらしたり
すればいいのかな」ということになっています。

[実践報告２]

身近な野鳥「ツバメ」を通して自然・地域を見つめよう

横浜市立恩田小学校　　堤　達俊

１．ツバメと教科との関連

（１）ツバメの特性と１・２年生活科との関連

ツバメは、学校の昇降口などによく営巣する、子どもにとってはとても身近な野鳥の一つである。身近な野鳥は他にもいるが、繁殖の様子を比較的容易に観察できる野鳥は、他にあまりいない。

子どもたちにとって、「春と遊ぼう」や「夏と遊ぼう」などの活動と共に扱うことにより、学校内や地域の自然への関心を高めることができる。また、取材活動を通し、地域の人たちとの交流も深まる。これらの活動を通して、学校や地域への愛着が高められるようにしたい。

（２）３年社会科との関連

ツバメは、学校だけでなく人家の軒下にも営巣する、地域の人たちにとっても身近な野鳥である。

「まちたんけんをしよう」の単元で、地域の様子を調べる際に、ツバメの巣のある場所を探すことによって、地域の自然の様子やそれを取り巻く人々の様子を調べることができる。本事例を取り上げることによって、社会の学習をより豊かなものにすることができると思われる。

（３）４・６年理科との関連

ツバメは、春になると南の国から日本にやってきて繁殖し、秋になると再び南の国に帰っていく渡り鳥（夏鳥）である。

４年「季節と生き物」では、この渡り鳥としてのツバメを取り上げることによって、季節の移り変わりをわかりやすくとらえることができる。

また、ツバメは、飛んでいる昆虫を主食とする最も身近な肉食性の生物でもある。つまり、生態系でも上位に位置する生物である。

６年「生き物のくらしと自然環境」では、このツバメを窓口にして自然を見つめることにより、生態系の様子を垣間見ることができ、身近な地域の自然環境について考えることもできる。

（４）３～６年総合的な学習との関連

これまで挙げたように、ツバメは、他の生物にない多くの特性を持っている。このツバメを核にし、子どもが自ら学習問題を設定し、問題解決的な学習を行うことによって、自然環境全体について考えることも可能である。また、渡りを通して、国際理解教育との関連を図ることもできる。このように、ツバメは、様々な可能性を秘めた教材と思われる。

２．活動のねらいと取り扱いの視点

本事例のねらいは次の通りである。

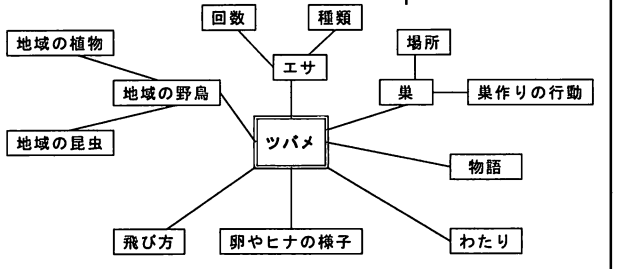
○　ツバメを通して身近な自然、地域、そこに住む人々の様子について関心をもち、それらを大切にしようとする心情を育てる。

本事例では、前述したように、ツバメを通して身近な自然に対する関心を高めるだけでなく、人々との交流を通して地域全体への関心をもつことを目的としている。また、これらの活動を通して、地域やそこに住む生物・人々を大切にしていこうという心情や態度を育てることも大切である。

本事例では、ツバメに関する様々な問題解決的な学習を行う。その過程で、学校の職員はもちろん、地域の方・ＮＰＯなどの専門家などの協力を仰ぐことも多い。さまざまな人々との交流を深めることにより、人の魅力についても感じ取ることができるようにしたい。

３．展開計画

主　な　活　動	教師の支援
○　学校の昇降口に営巣したツバメを見たり、学校周辺を歩いたりして、学習問題を見つける。（２） ○　活動の計画を立てる。（２） ・調べたいテーマごとにグループを作ろうよ。	・発見したことを友達同士で教え合い、関心が高まるようにする。 ・ツバメを核にし、そこから学習テーマを広げていくようにする。



○各グループごとに調べ活動を行う。（３０） ・ツバメって、一生懸命子育てをするんだね。 ・わからないことは、地区センターで調べたり、地域の人や専門家に聞いて見ようよ。 ○調べたことを発表しあう。（２） ・学校の周りには、自然がいっぱいあるんだね。 ・これからは、もっと自然を大切にしたいな。	・実際に地域を回ったり、人に聞いたりしながら調べ活動を行うようにする。 ・ツバメだけでなく、周りの環境にも目を向けるようにする。

４．子どもたちの主な活動

本事例は、小学校３年生が、総合的な学習としてクラスで取り組んだものである。

（１）巣のある場所を調べる。

学区を回って、ツバメの巣の場所を探し、地図にシールを貼ってまとめた。子どもたちは、それまでツバメに関心がなかったせいか、巣のある場所をほとんど知らず、地域の人に教えてもらうこともあった。その際に、単にツバメの巣のある場所を教えてもらうだけでなく、「昔に比べてツバメの巣は少なくなったわね。」「ツバメが巣を作る家には幸せが来るのよ。」などということを教えてもらうこともできた。そのため、ツバメだけでなく、人とツバメの関わりについても考えることができた。

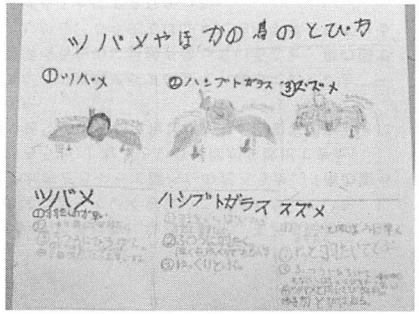
▲　ツバメの巣の位置を表した地図

（２）巣作りの行動を調べる。

子どもたちは、巣から適度な距離を開けた場所から、ストップウオッチを持って、巣作りのために土を運ぶ間隔を静かに計測した。約３分おきに土を運ぶ親鳥の大変さに驚いていた。

（３）ツバメや他の野鳥の飛び方を調べる。

最初、ツバメの飛ぶ速さを調べたかったようだが、実践した子どもたち（３年生）は算数で速さの学習を行っていないため、ツバメの飛ぶ速さを調べることはできなかった。そこで、子どもたちは、テーマをツバメの飛び方に替えて観察を行った。その後、他の野鳥の飛び方にも関心を示し、ツバメと比較して観察することができた。



▲　ツバメと他の野鳥の飛び方の比較

（４）ツバメを題材にした物語を調べる。

ツバメを題材とした物語を調べ、読み楽しもうとする学習を行った。本を探すために近くの地区センターの図書室に行き、係の人に聞いたり、インターネットで調べ、そのいくつかを読んだりした。

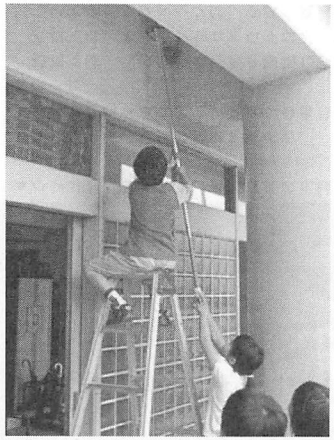
（５）ツバメ以外の野鳥の観察をする。

ツバメを観察した子どもたちは、「学校の周りにはどんな野鳥が住んでいるのだろう。」と、他の野鳥へも関心を持つようになった。そして、近くの谷戸へ双眼鏡を持っていき、バードウォッチングを行った。ムクドリ・オナガ・ヒヨドリといった身近な野鳥を見つけて喜んでいた。観察の際には、野鳥図鑑では、掲載されている種が多すぎて子どもたちに扱いづらいと思われたので、小学生用に開発され、身近な野鳥のみを取り扱った野鳥シート（全国愛鳥教育研究会：企画・財団法人　日本鳥類保護連盟：製作）を教材として使用した。

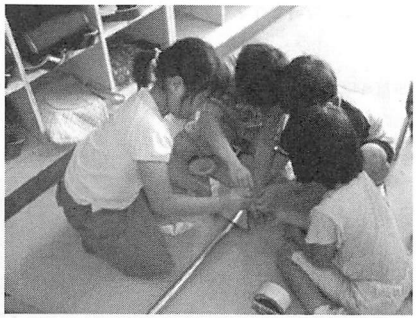
子どもたちは、それ以降、野鳥への関心を高く持つようになり、野鳥を見かけると「あれはムクドリだね。」とか「あれは何という鳥かな。」という発言が聞かれるようになった。

（６）卵の様子を観察する。

ツバメは、比較的警戒心が少ないので、営巣の様子を観察しやすい。また、抱卵中も、親鳥が採餌のために巣を離れることがある。その間に、巣の中の卵の様子を観察する方法を考えた。



▲　巣の中の卵の観察



▲　巣の中の卵を観察する道具の製作

子どもたちは、観察する道具を作るのにかなり苦労していたが、試行錯誤の末、竹馬の足を載せる部分の裏に平面鏡を取り付けて、巣の中の卵を観察することを考えた。実際に鏡に映った卵を観察できた時には大きな歓声が上がった。

※　この活動は、ツバメへのストレスを与えやすいので、十分に注意する。ツバメを驚かせると、繁殖活動を放棄してしまう可能性もある。作った観察道具が、きちんと使えるものになっているか調べる時は、もう使用していない古巣を使って確かめると、ツバメへの負担を軽減できると共に、子どもたちもじっくりと取り組むことができる。

また、単にツバメを観察する場合でも、双眼鏡・望遠鏡を使用してツバメとある程度の距離を保ち、むやみに近づかないようにすることが大切である。

▲　観察した卵の様子

また、卵やヒナの採取・捕獲は鳥獣保護法にて禁じられている。

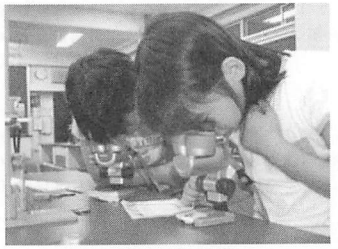
※　この活動は、ツバメへのストレスを与えやすいので、十分に注意する。ツバメを驚かせると、繁殖活動を放棄してしまう可能性もある。また、単にツバメを観察する場合でも、双眼鏡・望遠鏡を使用してツバメとある程度の距離を保ち、むやみに近づかないようにすることが大切である。

また、卵やヒナの採取・捕獲は鳥獣保護法にて禁じられている。

（７）エサの種類を調べる。

ヒナがかえると、子どもたちは、エサを運ぶ回数やその種類を調べたり、その様子をデジタルカメラで写真に撮ったりする活動を行った。

ツバメが食べるエサの種類は、図書室の本で調べ、飛んでいる虫を食べることがわかった。しかし、子どもたちは、ミミズや地面にいる昆虫も食べるのではないかと予想し、捕まえてきたミミズや昆虫の幼虫を巣の近くの地面に置いてみた。しかし、ツバメは見向きもしませんでした。



▲　ツバメの糞の観察

そこで、ヒナの糞を拾い、水を入れたコップに入れ、糞をバラバラにし、ろ紙でこして双眼実態顕微鏡で観察した。すると、小さな昆虫の腹や足、羽根などが見えた。結果的に飛んでいる虫を食べているのかどうかはわからなかったものの、ツバメは昆虫類を食べる肉食性の野鳥だということはよくわかった。そのことにより、生態系の一部を垣間見ることができたようだ。

（８）わたりについて調べる。

夏休みが終わって学校に登校してみると、ツバメの巣は空になっていた。子どもたちは、図書室にあったツバメに関する本を読んで、南の国に渡っていくらしいことはわかっていた。しかし、「本当に南の国へ行ったのだろうか。」「それをどうやって調べたのだろうか。」「南の国ってどこだろうか。」「南の国で何をしているのだろうか。」などという疑問が多数出てきた。

そこで、子どもたちは、（財）日本野鳥の会や近くの博物館に電話したり、図書室のツバメに関する本の著者に直接手紙を出したりして調べた。

その結果、ツバメはフィリピンやマレーシアなどの東南アジアの国々へ渡っていくこと、一部は静岡や九州で越冬すること、渡りのことを調べるために足輪を使っていること、南の国では繁殖しないこと、などを知ることができた。しかし、３年生では、まだ地域学習をしている段階であり、これ以上、他の国々へと関心を広げることはできなかった。

（９）野鳥の巣について調べる。

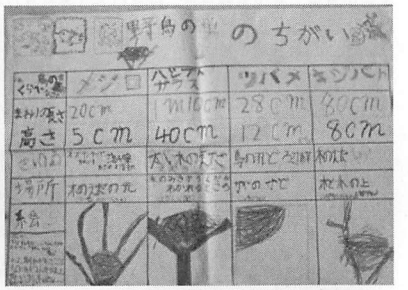
渡りが終わって、繁殖の様子を観察したツバメの巣をじっくり見た子どもたちは、「他の野鳥の巣も見てみたい。」と思うようになった。早速、校内や近隣の公園を探したところ、校内でキジバトの古巣を見つけることができた。また、技術員さんに「メジロの古巣があるよ。」と教えてもらうこともできた。

学校に隣接する公園では、ハシブトガラスの古巣が木の高い場所にあることがわかった。子どもたちではとても取れる高さでなかったため、公園緑地事務所へ連絡すると、翌日、係の方が来て取ってくれることになった。取ってもらったハシブトガラスの古巣を見て、子どもたちは大喜びだった。

子どもたちは、集めた古巣や観察したツバメの巣を、周りの長さ・巣材の種類・巣のあった場所などについて比較して調べ、表にまとめた。子どもたちは、その違いにとても驚いていた。

▲公園管理事務所の方にハシブトガラスの巣を取ってもらう

▲ハシブトガラスとメジロの古巣の比較



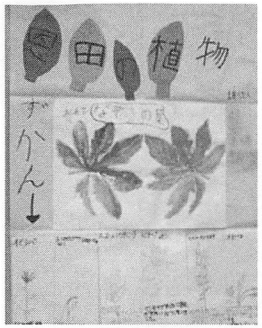
▲　野鳥の巣の違い

（１０）地域の植物や昆虫を調べる。

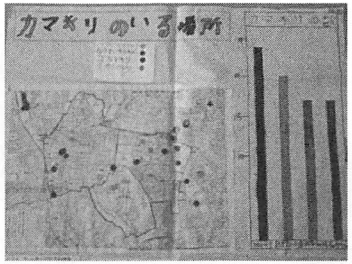
ツバメを調べることで、身近なの自然への関心が広がった子どもたちは、地域の植物や昆虫を調べた。

植物では、学校周辺の野草を採集し、図鑑で調べることができた。

昆虫では、オサムシやコオロギなど、種類を決めてくわしく調べようとしていた。カマキリについて調べたグループは、学区で見られる４種類のカマキリのいた場所をツバメの巣のように地図に印を付けて記録するだけでなく、算数の「表とグラフ」の学習を生かし、見つけたり友達に聞いたりしてわかったカマキリの数を種類別にグラフに表すこともできた。



▲　地域の植物調べ



▲　地域の昆虫調べ

5．活動の成果と課題

子どもたちは、これらの学習を通して、以下のようなことを学ぶことができた。

①ツバメを通して身近な自然環境に関心を持つことができた。

子どもにとって最も身近な野鳥ツバメは、生態系の中でも上位に位置する生物である。つまり、ツバメの食性を調べることで、エサとなる昆虫へも目がいくようになった。

また、繁殖活動を観察するのが比較的容易なため、子どもたちの関心が高くなり、意欲が持続した。また、ツバメから身近な自然へと関心が広がりやすかった。

②ツバメや身近な自然について調べることを通して、問題解決の能力・情報処理　の能力を高めることができた。

単に調べ活動を行うだけでなく、調べた結果をどのようにまとめると見やすいか、わかりやすく伝えられるか、ということを考えるのに、大変役立った。

③ツバメや身近な自然について調べることを通して、地域に関心を持ち、愛着を　もてるようになった。

ツバメは、主に人家や建築物に営巣するため、人間との関係が深い野鳥の一つである。そのため、巣のある場所を探す活動などを通して地域やそこに住む人たちへの関心が高まった。

④ツバメについて調べる活動を通して、人とのつながりを深めることができた。

ツバメについて深く調べるためには、子どもたちだけの力では足りなく、専門家や行政の方々・学校の職員の力を借りることとなった。また、地域の方へ取材することもあった。子どもたちは、これらの活動を通して、多くの方々の存在に気づき、温かい対応を受けることにより、人とのふれあいや交流を深めることができた。

⑤ツバメの渡りを調べることは、国際理解教育へと広がりをもつことができる。

今回の３年生の実践では、子どもの発達段階から国際理解へと広がりをもたせることはできなかったが、学年によっては、ツバメの渡りをきっかけにして、国際理解教育へつなげることができると考えられる。国際交流団体やインターネットなどを活用すれば、現地の子どもたちとの交流も可能になると思われる。そのような活動に深めることができれば、渡りを通して、世界の自然についても考えることができるだろう。

また、さらに発展させて、冬鳥として日本にやってくる野鳥の繁殖地の自然についても考えることができると思われる。

これらのことから、身近な野鳥「ツバメ」を題材にして環境について考えることは、大変有意義なことだと考えることができる。

ツバメかんさつ全国ネットワーク

（財）日本野鳥の会　自然保護室　広域調査プロジェクト担当　神　山　和　夫

「ツバメかんさつ全国ネットワーク」は、各地で行われているツバメ観察の記録を電子地図ソフトウエアとインターネットを使って全国的に集計しようという試みです。

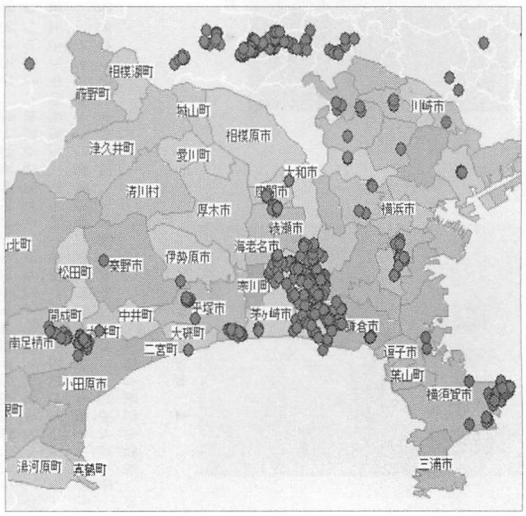
ツバメを観察したそれぞれの人が、電子地図ソフトウエアに観察記録を入力してインターネットで送信すると、ホームページの全国地図に観察地点と観察記録が表示されます。

2004年はネットワークがスタートした初めての年でしたが、日本中から約2000ヵ所のツバメの巣の情報が寄せられました。しかし、学校での利用にはやや問題があることも分かりました。学校のインターネット利用環境はセキュリティ設定が厳しいため、電子地図ソフトが利用できないことも少なくないようです。

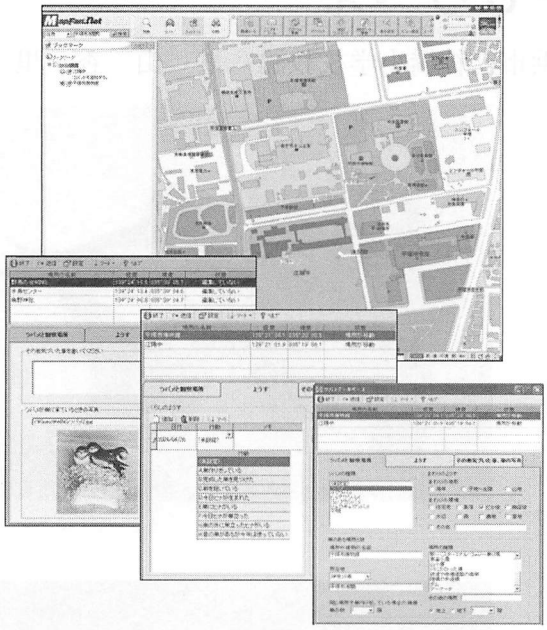
今後ソフトウエアを改良して、セキュリティ設定が厳しくても動作するようにバージョンアップすることを計画しています。

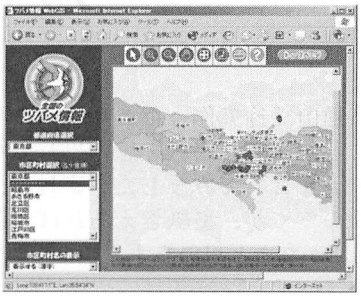
北海道	4	三重県	12
青森県	0	滋賀県	12
岩手県	1	京都府	45
宮城県	21	大阪府	44
秋田県	8	兵庫県	38
山形県	4	奈良県	7
福島県	8	和歌山県	0
茨城県	14	鳥取県	0
栃木県	3	島根県	14
群馬県	67	岡山県	89
埼玉県	39	広島県	11
千葉県	13	山口県	5
東京都	254	徳島県	0
神奈川県	557	香川県	2
新潟県	1	愛媛県	16
富山県	5	高知県	1
石川県	146	福岡県	3
福井県	4	佐賀県	2
山梨県	7	長崎県	9
長野県	36	熊本県	137
岐阜県	44	大分県	1
静岡県	60	宮崎県	7
愛知県	57	鹿児島県	0
		沖縄県	0
		合計	1808

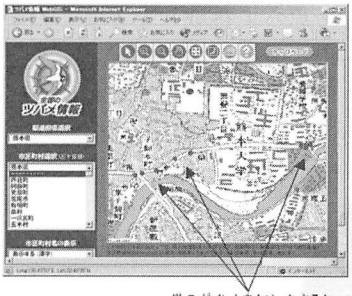
2004年8月12日現在のツバメの巣の報告



ツバメかんさつ全国ネットワーク　http://www.tsubame-map.jp/



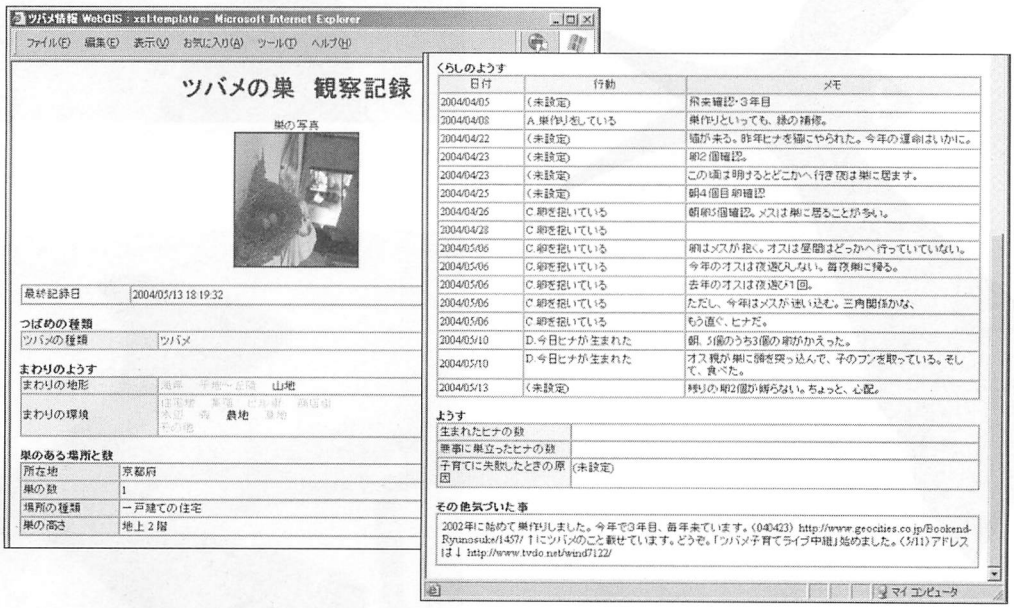




巣のポイントをクリックすると
観察記録を表示できます

パソコンの電子地図ソフトで観察記録をつける　インターネットで送信すると →　全国地図に表示される

ホームページの全国地図にある巣のポイントをクリックすると、観察記録が表示されます。



ツバメ情報 WebGIS : xslt:template - Microsoft Internet Explorer

ファイル(F)　編集(E)　表示(V)　お気に入り(A)　ツール(T)　ヘルプ(H)

ツバメの巣　観察記録

巣の写真

最終記録日	2004/05/13 18:19:32

つばめの種類

ツバメの種類	ツバメ

まわりのようす

まわりの地形	海岸　平地～丘陵　山地
まわりの環境	住宅地　繁華　田んぼ　河川　農地　海　農地　草地　その他

巣のある場所と数

所在地	京都府
巣の数	1
場所の種類	一戸建ての住宅
巣の高さ	地上２階

くらしのようす

日付	行動	メモ
2004/04/05	(未設定)	飛来確認・3年目
2004/04/08	A.巣作りをしている	巣作りといっても、昨の補修。
2004/04/22	(未設定)	猫が来る。昨年ヒナを猫にやられた。今年の運命はいかに。
2004/04/23	(未設定)	卵2個確認。
2004/04/23	(未設定)	この頃は明るるとどこかへ行き夜は巣に居ます。
2004/04/25	(未設定)	朝4個目 卵確認
2004/04/26	C.卵を抱いている	朝卵5個確認。メスは巣に居ることが多い。
2004/04/28	C.卵を抱いている	
2004/05/06	C.卵を抱いている	卵はメスが抱く。オスは屋敷はどっかへ行っていていない。
2004/05/06	C.卵を抱いている	今年のオスは夜通しない。毎夜巣に帰る。
2004/05/06	C.卵を抱いている	去年のオスは夜通し1回。
2004/05/06	C.卵を抱いている	ただし、今年はメスが迷い込む。三角関係かな、
2004/05/06	C.卵を抱いている	もう直ぐ、ヒナだ。
2004/05/10	D.今日ヒナが生まれた	朝、5個のうち3個の卵がかえった。
2004/05/10	D.今日ヒナが生まれた	オス親が巣に顔を突っ込んで、子のフンを取っている。そして、食べた。
2004/05/13	(未設定)	帰りの卵2個が帰らない。ちょっと、心配。

ようす

生まれたヒナの数	
無事に巣立ったヒナの数	
子育てに失敗したときの原因	(未設定)

その他気づいた事

2002年に始めて巣作りしました。今年で3年目、毎年来ています。(04/4/23) http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ryunosuke/1457/ ↑にツバメのこと載せています。どうぞ。「ツバメ子育てライブ中継」始めました。(5/11)アドレスは↓ http://www.tvdo.net/wind7122/

マイ コンピュータ

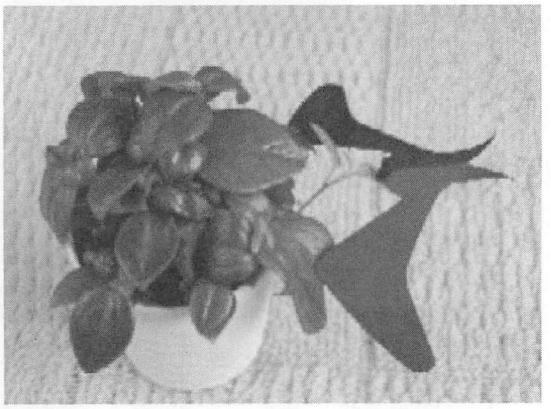
毎回好評！　恒例　巣山香里のバードクラフトコーナー

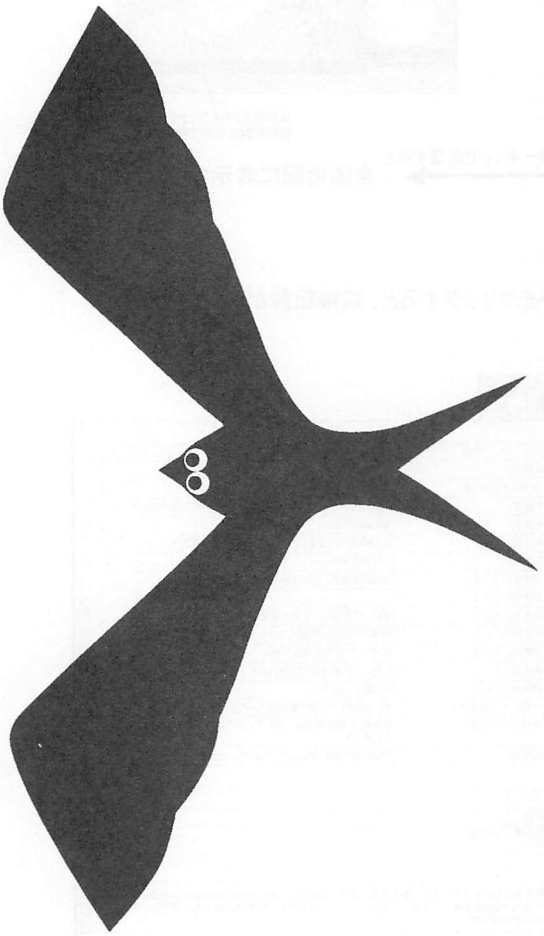
ツバメやじろべえ

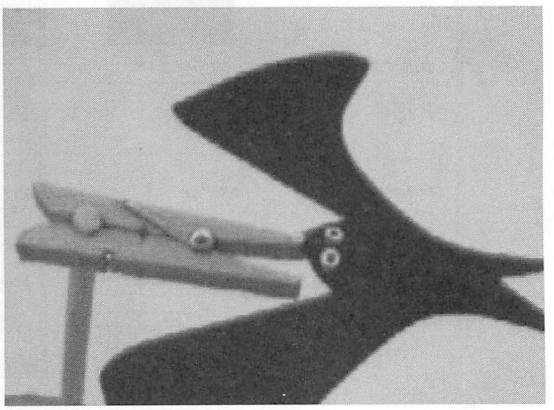
横浜市立神橋小学校教諭　巣　山　香　里

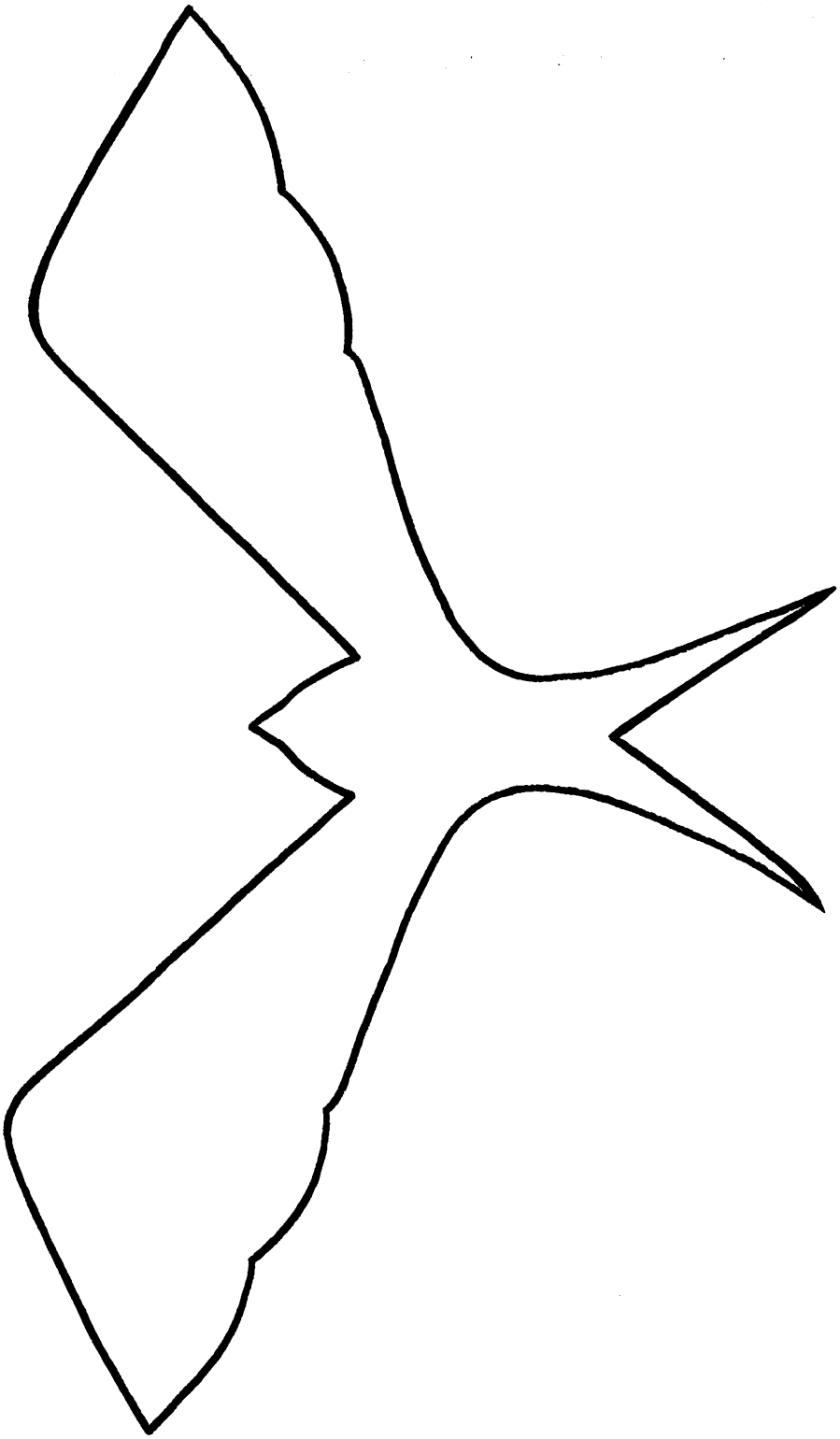
以前、高野山で竹で作ったとんぼのやじろべえを見たことがあり、それを思い出してハサミでチョキチョキとしてみました。素材は、竹ではなく紙なのですが、型紙さえあれば何度でも手軽に作れるかなあと思います。

ツバメをと思って挑戦してみましたが、やじろべえとは何とも微妙なもので、こんな鳥はいないだろうというものになってしまいましたが、みなさんもチャレンジしてみてください。









もりまき通信(21)

「外来種・移入種専門センター」の一案

自然観察指導員　桐原(森)　真希

●外来生物法施行

2005年6月1日、帰化生物・移入生物に関する法律が施行された。「特定外来生物による生態系等に係わる被害の防止に関する法律」略して「外来生物法」。アライグマや、オオクチバス、タイワンリスなど37種が「特定外来生物」に指定された。指定された生物は、飼育、栽培、運搬、保管、輸入、譲渡などが規制される。さらに要注意外来生物リストも作成され、環境省のホームページでその詳細を見ることができる。

そのホームページの中に、「Q＆Aこんな時はどうしたらいいの？」のコーナーがあり、特定外来種を飼いきれなくなった場合の解答があった。その一部を抜粋する。

■特定外来生物に限らず、生き物を飼い始めた場合は、最後まで飼い続ける責任を持たなければなりません。

■どうしても出来ない場合は、あなたが責任を持って殺処分してください。残念ですが、これは許可を受けた者として負っていただく責任です。故意に逃がした場合は処罰の対象となりますので注意してください。

■このような事態に陥らないためにも、生き物を飼い始めるときは、その生き物の寿命、成長したときの大きさ、性格や生態といったことを十分調べた上で判断してください。

生態系や農林水産業への被害、人への被害などが明らかであったり、十分予測ができたりする種類については、この法の施行は遅きに失した感があるが、それでも施行されことの意味は大きいと考える。ただし、上記の抜粋部分で気になる言葉があった。

●個人で殺処分

「どうしても出来ない場合は、あなたが責任を持って殺処分して下さい。」これは、果たして簡単に出来るものだろうかと疑問に思った。自治体の保健所に依頼するのか、個人が何らかの手法で殺さなければならないのか、殺した後はどう処理するのか、庭に埋めるのか、焼却するのか。個人に処分をゆだねるとなると、色々と問題が生じる可能性があるのではないだろうか。特に大型の種に関しては、個人で行うのは困難を要するであろう。

外来生物法の施行前から特定外来種を飼育している場合は、特別な許可を取る手続きが必要とのこと。国内において個人で飼育されている特定外来種は、一体どれくらいの数がいるかは定かではないが、施行前はインターネットやペットショップ、ホームセンターなどで簡単に入手できる生き物であったからには、少ない数ではないであろう。

また認定を受けた特定外来生物の防除活動で捕獲された生物は、種類ごとに公示される方法に沿って取扱われることになっており、その方法の中でやむを得ず殺処分をする場合もあると説明されている。出来るだけ苦痛を与えない方法で処分することになると補足があったが、今も年間何十万頭というノイヌやノネコが処分されていることを考えると、あまり表に出てきそうにない事項なのかもしれない。

家電リサイクル法で、エアコンやテレビを廃棄する時に、リサイクル料が発生することを義務付けにしてから間もなくは、家電の不法投棄がかえって増加したという。それと同じように、個人で殺処分をすることを嫌がる飼育者が不法に野外に放棄する例が増えることも容易に想像される。

●三浦半島のアライグマ

2005年7月にＮＨＫで放送された「地球だい好き！環境新時代」に、三浦半島で生息域を拡大するアライグマが紹介されていた。農業被害を受けている人、家屋に営巣され10万円近くの修理代がかかった人、半島の生態系を調査している人、アライグマの里親を探している人など、様々な立場の方々の意見があり、外来種問題の根深さを感じた。横浜市が企画したアライグマ

をめぐるフォーラムでも、意見の対立があり議論は平行線。一刻も早く全面駆除すべしとする意見と、殺さないでという意見の双方が歩み寄るアイディアが出て来ないのだ。

私個人としては、どちらの意見も大切だと思う。しかし、動物愛護団体や動物福祉団体ができることには限界があるのではないか。実際、番組の中でも、捕獲されたアライグマの里親探しは難航している様子だった。

特定外来種の中でも、セアカゴケグモや、アルゼンチンアリなどの節足動物、またミズヒマワリやナガエツルノゲイトウといった植物が駆除の対象の場合、「かわいそうだから駆除反対」と大きく反応する立場の人の発言はあまり聞かれない。しかしながら、タイワンザルやジャワマングース、ヌートリアなどの哺乳類、ソウシチョウ、ガビチョウなどの鳥類、グリーンアノールといった爬虫類を含む脊椎動物の特定外来種は、「駆除のため、捕獲して殺処分し焼却しました」となれば敏感に反応するというのが、人情かもしれない。同じ命には変わりないのだが、生き物の差別化・区別化をしてしまう感性は、立場や考え方により、これまた多様である。いずれにしても、殺処分、安楽死に反対する意見も、完全に無視することはできない。

●「環境省生物多様性センター」があるならば

山梨県富士吉田市に「環境省生物多様性センター」がある。日本国内の動植物の生育状況や分布、自然環境の調査などを行っている。特定外来種は、この生物多様性に脅威を与える存在であり、相対するものといってよいであろう。

であるならば、「外来種・移入種専門センター」または「外来種動物園博物館」を新たに開設してみるのはどうだろう。または、「生物多様性センター」にその機能を併設したらどうだろうかと思う。

日本国内の外来種問題だけでなく、世界各国の外来種問題も取り上げた、移入・外来・帰化生物における全ての情報の集約場所であり、かつ、教育啓蒙のための施設としての役目を持ち、国内で捕獲された特定外来種の一時保護施設としての機能も併せ持つという構想を勝手ながら考えてみた。

このような機関が存在すれば、動物愛護団体や動物福祉団体の意向も、かなり取り入れることができるのではないかと思う。また個人で殺処理が困難な場合に対応した、外来種を引き取る仕組みとそのための窓口を開設するといったこともできるのではないだろうか。もちろん、そうなれば各都道府県の保健所との連携も必要になってくるだろう。

●実現は不可能？

しかし、そう簡単に実現できるというわけではなさそうである。現時点でも問題が山積みである。というのも、仮に、全国で捕獲された全ての特定外来生物の脊椎動物、鳥類等を移送し保護するとなれば、その頭数は夥しい数にのぼるであろうし、移送費や餌代など一体誰が支払うことになるのか。今後、指定される種が増える可能性が高いことを想定すると、敷地も広くなければならない。保護された動物も、飼育資格を持つ施設や個人の里親へと引き渡される場合は良いにしても、病気や怪我をしている個体については、そうもいかないであろう。各地の動物園や、動物を扱う研究機関（例えば獣医学部がある大学など）で引き取ってもらうにしても、そういった需要は大口ではないと思われる。

二次的利用として、剥製や骨格標本を作って学校や博物館などの教育機関に寄贈するという方法も考えられる。しかし、購入してもらうにしても、標本製作だけでも大きな出費となる。ちょっと過激ではあるが、命を無駄にしない食材としての利用なども考えられる。しかし、これも難しそうだ。個体そのものがどんな育ち方をしたか分からない上に、リスやサルを食べるという習慣は日本人にはなじみにくいものである。毛皮利用に限っても、果たして良い効果が出てくるか想像しにくい。保護するのであれば、避妊手術も施さなければならないが、これにも費用がかかる。また、保護された個体を、その寿命が尽きるまで飼育するといっても、経済的にも物理的にも非現実的であろう。本来の生息場所や原産地に送り返すといっても、原産地でよほど個体数が激減し、他から移入して種の保存を図るといったことがない限り、安易に持ち込むべきでもないだろう。原産地でも適正なバランスの個体密度があるからである。そうでなくても、移送費がかかる。

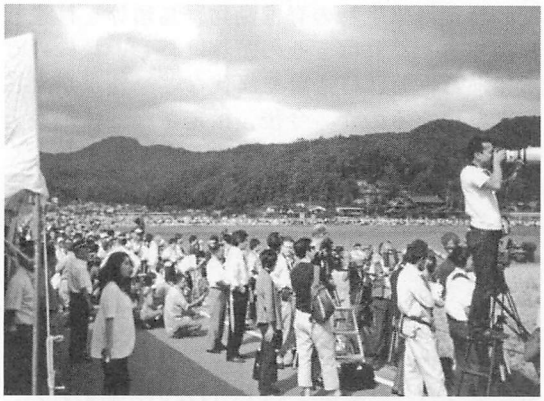
他に妙案がないものか。ひらめいた方が、環境省の自然環境局野生生物課外来生物担当

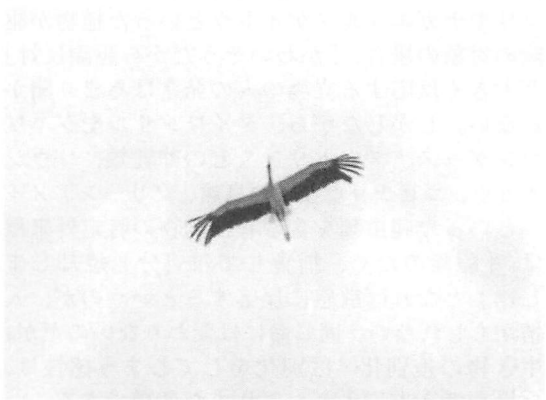
(03-3581-3351(代表)) にご意見として伝えることで、新たな進展が生まれるかもしれない。

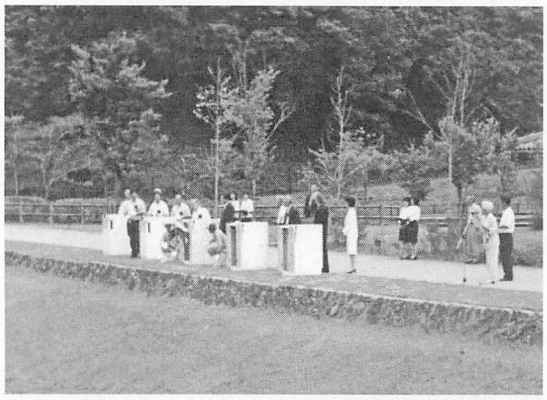
●生き物に罪はない

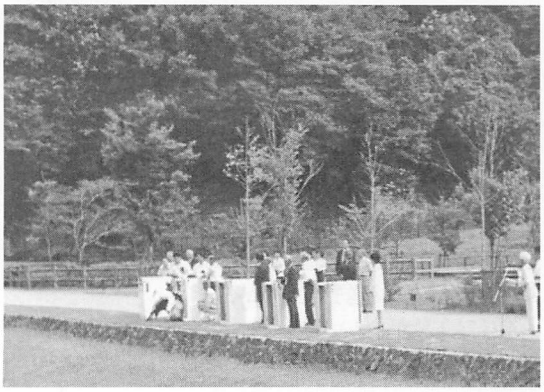
外来種問題の全ての根源は「人間」である。意図的、非意図的を問わず、持ち込まれた外来生物たちは、だた新天地で懸命に生きているだけである。しかし、その存在が与える影響の大きさが放置できない状態になって、ようやく法律が施行された。まだスタートしたばかりのシステムであるだけに、今後の動向が大いに気になる。

自然や生き物に対して、無知であったり謙虚さを欠いた行いは、結局は人間の社会に悪い形で返ってくる。生物多様性や外来種問題について、国や地域の行政は、もっと教育普及活動を行っていくべきであろう。









コウノトリの野生復帰事業・放鳥の開始

事務局　箕輪　多津男

平成17年9月24日（土）～25日（日）、兵庫県豊岡市において「第3回コウノトリ未来・国際かいぎ」が開催されました。当日は、秋篠宮殿下、同妃殿下のご臨席のもと、内外の鳥類学研究者をはじめ、農業、まちづくり、教育等の各関係者、さらには多くの市民ボランティアや子供たちなど、大変多くの方々の参加により、記念すべき一大イベントが展開されました。

その一環として、特に全国的な注目を浴びたのが、飼育下にあったコウノトリの放鳥でした。豊岡市の位置する豊岡盆地とその周辺は、古くから野生のコウノトリ（留鳥）が生息する地として有名でしたが、人為的な環境の改変による営巣木の減少や餌動物の不足、あるいは農薬の大量使用による影響等により、徐々に数を減らし、1971年（昭和46年）、ついに野生個体が絶滅するに至りました。一方で1965年(昭和40年)から、捕獲した個体を中心に、地元に設置された飼育場において繁殖事業が開始されましたが、長い間雛の姿を見ることは適いませんでした。しかし、旧ソ連のハバロフスク地方から贈られた個体によって、1989年（平成元年）、念願の孵化に成功し（東京都の多摩動物公園では前年に初めて孵化に成功）、それをきっかけにその後は順調に数を増やし続け、今では118羽にまで達しました。こうした経過を経て今回、飼育下にあった5羽のコウノトリの野生復帰に向けた放鳥が行われたわけです。5羽の性別による内訳は雄が2羽と雌が3羽ということでしたが、なぜ雌を1羽多くしたのでしょうか。それは、既にご存じの方もいるかもしれませんが、この豊岡には2002年から1羽の野生のコウノトリが留鳥化して棲みついており、その個体が雄（地元では「ハチゴロウ」と名付けられている）であるため、放鳥後の雌雄が同数になる（それぞれがペアになる）ようにとの意図によるものです。

当日（24日）は午後2時30分頃に、兵庫県立コウノトリの郷公園の前面にある田圃から1羽ずつ順に放鳥がなされましたが、どの個体も実にきれいに飛び立ち、周辺に集まった多くの観衆(3500人と発表されましたが、それをかなり上回っていたような気がします)からは、その都度、大きな歓声とどよめきが上がり、中には感激のあまり涙を流す姿も見られました。私も、本事業に対しては陰ながら10年以上も関わってきた手前、やはり感無量といった気持ちを禁じ得ませんでした。

しかしながら、大変なのはむしろこれからということになるでしょう。何しろわが国ではこれまでに例のない、鳥類の本格的な野生復帰事業ということになりますので、未知の部分も数多くあり、今後成功に至るかどうかは数十年に渡る見通しと、科学的かつ専門的な知見をもとにした根気強い取り組み、生息環境の整備と農業との調和、地元住民の方々の協調と理解、そして周辺あるいは全国的な人々の応援など、あらゆる助けが必要となってくるに違いありません。海外のいくつかの鳥種における野生復帰事業の成功事例なども参考にしながら、より望ましい方向に推移してくれることを祈るばかりです。

わが国では、この後、佐渡におけるトキの野生復帰事業が控えています。また、その他にも絶滅が心配されている鳥種の飼育繁殖後の野生復帰事業が、いくつも検討されるようになってきています。こうした状況にあって、今回のコウノトリの放鳥は、言わば希望の星と見られるわけです。その星が輝き続け、これに新たな星が続いていくことを願わずにはいられません。

人と野鳥との真の共存のあり方を求めていくためにも、野生復帰事業というのは大変重い意味を持ってくるものと考えられます。放鳥されたコウノトリが、私たちに問いかけてくるものはいったい何であるのか、現場に立ち合った者の一人として改めて深く思いを廻らすこととなりました。コウノトリ、そして野生復帰事業について、これから一人でも多くの方に関心を持っていただければ幸いです。

（2005年・秋）

書評

『鳥よ、人よ、甦れ
ー東京港野鳥公園の誕生、そして現在』

加藤幸子著　2004年5月
(株)藤原書店　定価(本体)2,200円
ISBN: 4-89434-388-6

事務局　箕輪　多津男

今年の5月22日(土)～23日(日)の2日間にわたり、東京港野鳥公園において「東京バードフェスティバル　2004」が開催された。本研究会宛てにも、実行委員会の方々からお誘いの文書を頂戴したものの、残念ながら諸般の都合により出展は見合わせることになり、個人参加という形で会場に足を運ぶことにした。

そうした中、(財)日本自然保護協会の創設期の正職員を経験され、芥川賞作家でもある加藤幸子先生の記念講演を拝聴する機会に恵まれた。その演題が、ずばり「鳥よ、人よ、甦れ－東京港野鳥公園の誕生」。本書のタイトルそのものであった。

このタイトルの通り、本書は東京港野鳥公園の成り立ちに関わる様々な活動の経緯が、時系列を追うようにして生き生きと描き出されている。

大井埠頭の埋立地との出会いによって、東京都大田区の住民を中心に、加藤先生を代表として「小池しぜんの子」という自然観察会が発足したのが1972年のこと。以来、その会の活動を核としながら、全面的に東京都の卸売市場の移転が予定されていた大井埋立地を保護するための活動が、多くの協力者との連携とともに展開されていく。そうした中で、「野鳥公園」を設置する構想が生まれ、「小池しぜんの子」を中心に関係する自然保護団体が名を連ねて「大井自然公園推進協議会」が発足。大規模な署名運動を繰り広げると同時に、大田区議会や東京都議会、あるいは東京都知事宛に要望書や請願を提出。さらに、土地を管理する東京都港湾局、移転計画を推進している都の中央卸売市場、そしてそれを後押ししていた農林水産省にまで交渉に及ぶ。

こうして、政治や行政に対して、全く臆することなく正面から渡り合い、遂に、今に至る「東京港野鳥公園」の誕生に漕ぎ着けたことは、わが国の自然保護運動の歴史に大きな足跡を残すものとして、極めて高く評価されるに違いない。

なお本書には、「小池しぜんの子」の活動に関連して、本研究会の顧問を長年務めていただいている千羽晋示先生が登場。また、前・日本鳥類保護連盟会長で、当時環境庁長官の職にあった故・鯨岡兵輔先生が、都議会議員との交渉に際し、決め手となるような援助をされた様子なども克明に描かれている。一方で、現在も自然保護や環境教育の分野において第一線で活躍されている方々の当時の姿を知ることができ、それだけでも一読の価値がある。

東京港野鳥公園では、本研究会も過去に何度か研修会や観察会を催している。また、前会長であった故・江袋島吉先生もここをよく野鳥観察のためのフィールドとされておられた。

その他、ナホトカ号の油流出事故の際に、被害に遭った多くの水鳥の死体を冷凍庫に収容していただき、記録の整備やその後の分析・研究のために大いに尽力いただいたのもこの公園、およびそこで活動を展開している日本野鳥の会の方々であった。さらに、私が文部科学省によるあるプロジェクトに加わっていた際に、快くご協力いただいたのが、その当時、野鳥公園のチーフレンジャーを務めておられた故・大屋親雄氏であった。

このように、東京港野鳥公園という所は、私個人にとっても、多くのゆかりの方々を常に彷彿とさせるような、言わば心の故郷とでも言うべき場所なのである。

東京バードフェスティバルもスタートし、今後も自然保護や環境教育等の舞台として欠かすことのできない東京港野鳥公園。本書によって、

書 評

『ビオトープを考えるヒント』

木呂子 豊彦 著　2003年5月
新風社　定価（本体）1,200円
ISBN: 4-7974-2772-8

事務局　箕輪　多津男

本書は、わが国における今後の野生生物の保全を考えていく上で、欠かすことのできない重要な概念の一つと考えられる「ビオトープ」について、様々な角度から解説されている、言わば格好の入門書である。

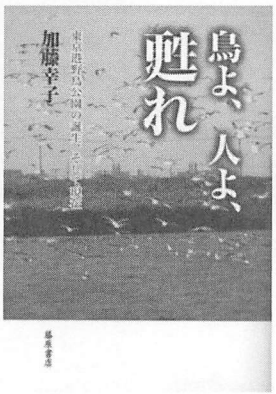
著者の木呂子豊彦氏は、全国学校ビオトープ・ネットワークの理事を務められ、技術士のほか、(財)日本生態系協会が認定している一級ビオトープ計画管理士として、日々活躍しておられる方である。本会も、中部地区で開催された「学校ビオトープシンポジウム」等で、同氏には過去に何度もお世話いただいている。

本書の構成は、大きく２部に分けられており、うち第１部では、ビオトープとしての自然環境の捉え方や、学校におけるビオトープづくり、さらには生物の生育環境の保全につながる活動から、環境教育や福祉への展開に至るまで、大変幅の広い論述がなされている。どの項に関しても、著者のこれまでの取り組みや経験に裏打ちされた、具体的な記述がなされており、紹介されている各種の事例とともに、大変参考になるに違いない。

一方、第２部においては、2001年９月に派遣された「アメリカ合衆国集水域調査団（略称）」に団員として参加された際の、一連の視察記録がまとめられている。その中でも、特にフロリダ州のキシミー川の蛇行復元事業の例などは、自然環境の本質的な復元を実証する上でも目を見張るものがある。

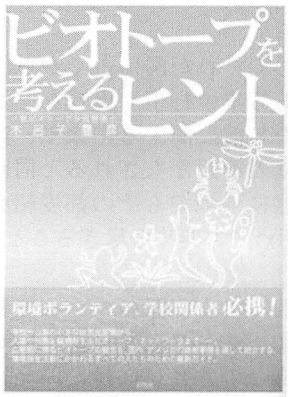
その他にも、連邦政府や州政府（メリーランドおよびフロリダ）、さらには関係ＮＧＯに至る各機関の訪問記がまとめられており、それぞれのレベルにおける自然環境の保全と復元に関わる活動の様子を窺うことができる。

本書によって、そのタイトルの通り、より多くの方々がビオトープについて考えていただければと願う次第である。特に、これからビオトープづくりに取り組もうと考えている方に、一読をお薦めしたい。　（2004年・夏）



その成り立ちに思いを馳せ、自然保護活動の原点を探ることは、そうした活動を展開していく上で、大きな活力となるに違いない。

（2004年・夏）



書 評

『鳥見びと　望見記』

皿井信著　平成16年6月
（財）豊橋文化振興財団
定価（税込）1,500円
ISBN: 4-924966-32-1

事務局　箕輪　多津男

本書は、全国愛鳥教育研究会の理事でもある皿井信先生によって著されたもので、以前本誌でもご紹介させていただいた『鳥見びと　徒然草』に続き、（財）豊橋文化振興財団がシリーズ化して発行している『ちぎり文庫』の第32集として収められている。

内容としては、平成11年から平成16年にかけて、『東日新聞』、『豊橋文化』（豊橋文化振興財団）、『Ａｍｉ』（三遠南信情報誌）、『フォレスト』（穂の国森づくりの会）、『このはずく』（東三河野鳥同好会）にそれぞれ掲載されたものがベースとなっている。

「まえがき」にも述べられている「私の趣味は野鳥観賞です」という言葉の通り、著者の姿勢には、現象を忠実に追うような科学的な観察に留まらない、野鳥を始めとする多くの生きものに対する深い洞察と愛情が一貫して流れている。そのためか、野鳥に対する思い入れも半端なものではなく、例えば「夏鳥御三家」（キビタキ、オオルリ、サンコウチョウ）や、「夏のツグミ御三家」（アカハラ、クロツグミ、マミジロ）といった主張にも、読者はある種の信念と説得力を感じてしまうことだろう。

全編を通じて、わが国に古くから伝わる野鳥に関わりのある年中行事や風習などが織り込まれ、また鳥の名前に関する由来や、英名および学名についての解説がなされると同時に、様々な鳥種の生態についてもその都度紹介され、どこから読み始めても興味の尽きることがない。

一方、野鳥に接する際のマナーや密猟の問題等に対しては、鋭い切り込みがなされる。特に、人と野生動物との共存に向け、開発行為や有害鳥獣駆除の現状に関わる諸政策の根本的な見直しを迫るくだりは、愛鳥教育に携わっておられる、多くの方々の共感を呼ぶに違いない。

書名はやや古風ながら、本文は大変読みやすく書かれているので、是非、気軽に手に取っていただきたい一冊である。

＜本書の問い合わせ先＞
（財）豊橋文化進行財団（TEL: 0532-61-6145）
＜郵送による購入の申込み先＞
皿井　信（TEL: 0532-45-8896）
〒441-8106　豊橋市弥生町字西豊和65-4
定価：1,500円／郵送料：290円
【郵便振替口座　00850=7=126330　皿井　信】

（2004年・夏）

書 評

『鳥のおもしろ行動学』

柴田敏隆 著　2006年９月
（株）ナツメ社
定価（本体）1,300円
ISBN:4-8163-4150-1

事務局　箕輪　多津男

様々なテーマを取り上げつつ、解りやすい図説と読みやすい文章で好評を博している「図解雑学シリーズ」の新たな一冊として出版されたのが本書である。著者は、読者の方々にはもうおなじみの柴田敏隆先生である。

解説されている内容は、鳥の身体のしくみから始まって、食性や日常の行動、営巣や育雛などの繁殖行動や渡りなども含めた様々な生態、さらには都市鳥と呼ばれる種の現代の情況に至るまで、実に多岐にわたっている。また、「文化鳥類学」とタイトルが付いた最終章（Chapter 6）では、人間の文化と野鳥との関係性について、歴史を繙きながら丁寧に綴られており、興味が尽きない。

一方、全体を貫いているものは、野鳥の生き様を知ることにより、私たち人間の生き方を省みようとする、鋭くかつ温かい視線である。野鳥を人間と同等の動物あるいは隣人（隣鳥？）ととらえ、全く横並びの存在として尊重し、人間優位の意識を払拭し、本当の意味での共存とは何かを伝えようとしている。

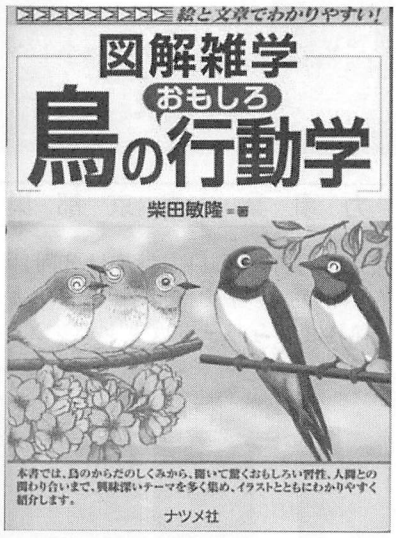
さりとて、堅苦しい言い回しや難解な表現はほとんど見当らず、すべてがさり気なく、時にはユーモアを交えた形で示されているので親しみやすく、普段、ほとんど野鳥に馴染みのない人でも、その主旨を理解することができるのではないかと思う。

巻末には用語解説も付されており、鳥について語る場合に使われる基礎的用語の確認と理解に役立つに違いない。

「愛鳥教育」は、まずは身近な野鳥に親しむことから始まる。そして、野鳥の存在がそれぞれの心の中に意識され、それがやがて掛け替えのないものとしてしっかりと根付いた時、人間と野鳥の共存を志向する確かな行動がそこから生まれてくるはずである。同時に、現代社会が失いかけようとしている大切なものを取り戻すための大きな鍵が、そこに存在しているものと確信する。

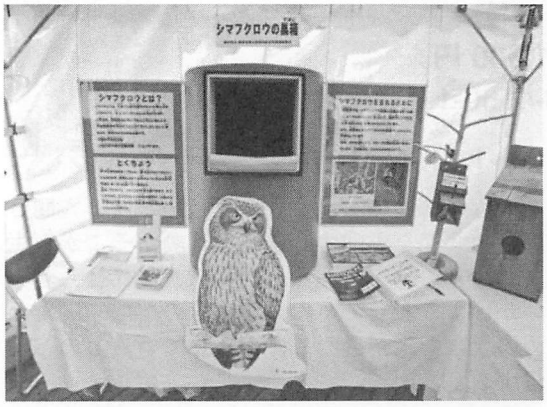
本書を通じて、一人でも多くの方々に野鳥の存在を、ひいては人間の存在を見つめ直す機会が訪れることを、そして、人にも野鳥にも明るい未来が開けていくことを、切に願う次第である。

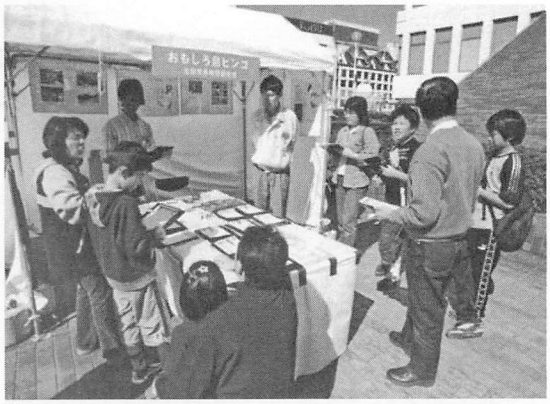
（2006年・冬）

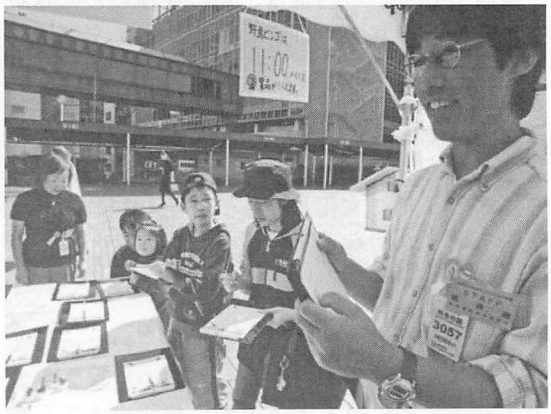


協力事業　東京都巣箱展風景　平成16（2004）年10月17日

NPO法人学習研究会の請負事業である「東京都巣箱展」に他団体と共に協力参加し、一般参加者に野鳥クイズによるビンゴゲームやコアジサシの野鳥やじろべえ工作などで楽しんでもらいました。

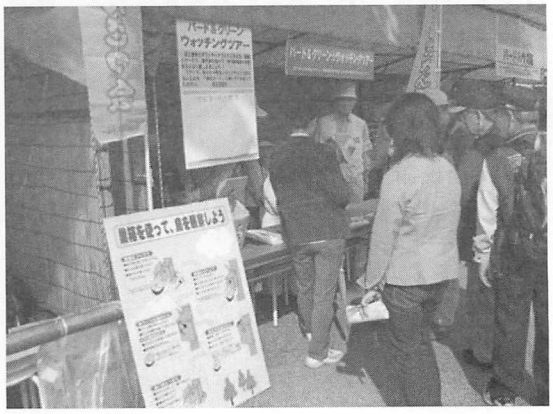


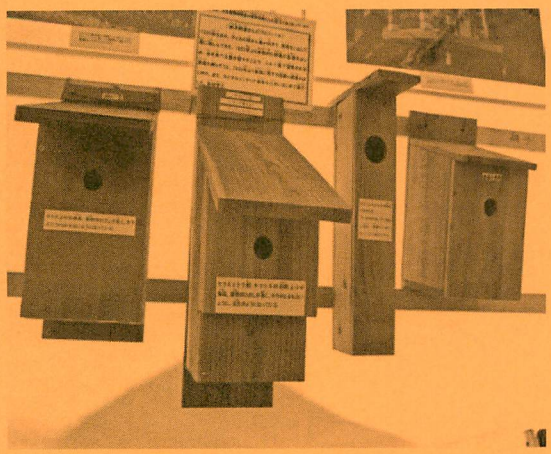


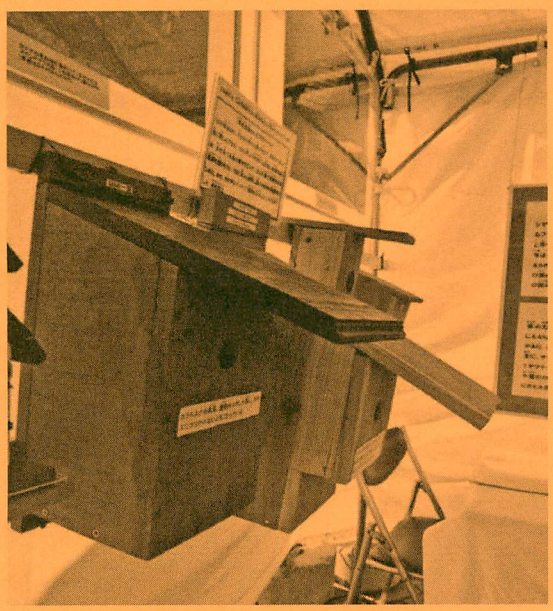


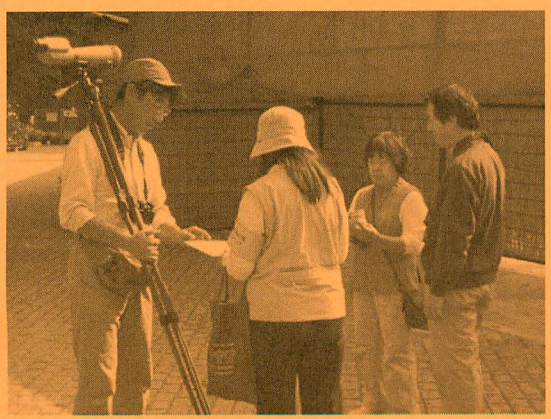
協力事業　東京都巣箱展風景　平成18（2006）年10月22日

「東京都巣箱展」への協力参加は3回目。前回から会場は東京都調布市にある神代植物公園。神代植物公園ガイドボランティアクラブ、NPO法人自然環境アカデミーの皆さんと共に、一般参加者を対象に公園内での植物観察とバードウォッチングとを同時に楽しんでもらいました。









編集後記

ようやく「愛鳥教育」71号をお届けできることになりました。この間、会の活動もいろいろと行ってはいたのですが、会員の皆さんに広くお伝えすることができず、誠に申し訳ありませんでした。

この間、各種配布物もたまりにたまってしまったので、今回同時にお届けすることになりますが、こちらもお目通しいただき、ご活用いただければ幸いです。

現時点での本会を取り巻く状況および本会自身の課題などを踏まえ、今後の本会の活動並びに機関誌「愛鳥教育」の発行については、別紙の通り、会長が説明していますので、こちらもぜひお読みください。

情報機器やインターネットの活用を視野に入れての構想を打ち出し、新しい会の在り方を目指しています。

新しい取り組みにより、愛鳥教育の火を消すことなく、さらに他団体との連携も視野に入れながら、これからも各種実践を行っていきたいと考えておりますので、会員の皆様のご理解とご支援ご協力をお願い申し上げる次第です。

（染谷）

愛鳥教育 No.71

平成19(2007)年4月30日

発行人　杉浦嘉雄
発行所　全国愛鳥教育研究会
住　所　〒104-0061
東京都中央区銀座2－10－11
八田ビル4F
NPO法人環境学習研究会内
電　話　０３－３５４７－１６５０
ＦＡＸ　０３－３５４７－１６５０
会　費　３,０００円
郵便振替　００１８０－７－１２４４２
印刷所　祐　文　社